
ゼロの使い魔～魔法使いの従兄弟～

天宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜魔法使いの従兄弟〜

【Nコード】

N4503N

【作者名】

天宮

【あらすじ】

才人が地球から姿を消してから二日後、地球にいる才人の従兄弟も行動を起こした。魔法使いの従兄弟は才人を連れ戻すという名目で、ハルケギニアに訪れる。しかし、そこでの出会いが彼を大きく変えることになった。

チートで最強なオリ主です。しかも、原作知識を序盤で入手します。嫌いな方はバックしてください。

プロローグ（前書き）

文才なし、計画なしですが、楽しんでくれると幸いです。

プロローグ

その電話は俺にとって予想外の知らせをもたらした。

「なに、才人の奴が行方不明になった？」

「そうなのよ。パソコンを取りに行ったきりで帰らないのよ。あの子って、抜けてるところがあるでしょ。誰かに騙されたのかしら」

「叔母さんも普段は本人に対してボロカスに言っているの、こういう部分で息子を愛しているのがわかるな。」

「落ち着いてください。あいつは抜けてますけど、なんだかんだ運がいい奴ですから。きっと、そのうち無事な姿を見せてくれますよ」

叔母さんを落ち着かせながらも頭を働かせる。

才人は特に目立つことのない普通の高校生だし、最近おかしい様子を見せていたわけではないとのことだ。つまりは偶然にも厄介事にあいつの方から首を突っ込んだか、もしくは巻き込まれた可能性が高いな。

いや、もしかしたら俺のせいかもしれない。

でも、きちんとあの組織は潰しておいたし、他にも問題ありそうなどころが行動を起こしたらならば、俺の耳に入るはずだ。

残っているのは一昨日の……

まさか、そこまで運が悪いことはないだろう。でも、あいつは抜けていたからな。

「俺の方も父さんと母さんに相談しておきますね」

「お願いするわね、唯人くん」

「はい、それでは」

ピピピ、ピピピ…！

形式通りの返事をして、電話を切った直後に携帯の方に連絡が入る。かけてきた名前を見ると、そのまま切ってしまいたい欲求にかられた。こいつが絡んでまともに済んだ試しがない。

次から次へと俺に恨みでもあるんじゃないか。

「なんだ。今は忙しいから後に「すまん。今回は緊急連絡だ。先日
の異変が起こった場所なんだが、巻き込まれた一般人がいた」

うわあ、久々に厄介事が重なる予感がする。

「巻き込まれた被害者は平賀才人という一般人だ。召喚された先は
ハルケギニアらしい。あの未開の魔法世界だな」

わあお、予想的中。全く嬉しくないけどな。

どうして俺の周りの連中は厄介事に好かれているんだろう。一回
ぐらい解剖でもして調べたら、何か共通点でも見つかるかもしれない。
い。

「そいつは俺の従兄弟なんだよ。だから、今回の案件は俺が全権を
持つ。上にはそう伝えておいてくれ」

「了解だ。お前ならサポートを派遣しなくてもいいな」

「ああ、俺一人で十分だよ」

「じゃあ、よろしく頼む」

とりあえず才人は最低でも一発殴るとして、召喚した奴も絶対に殴ってやる。後はこいつもだ。才人のことも分かかっていて電話をかけてきたに決まっている。

召喚した奴が男だろうが女だろうが知らん。ガキでも老人でも気にしないことにしている。俺は老若男女平等主義なのだ。相手がどんな奴でも気に入らなかつたなら殴ると決めている。

さて、こうなってしまった以上は早速ハルケギニアに行く用意でもするかな。どんな場所かは知らないが、地球とは違う娯楽の一つや二つはあるだろう。俺からしたら、ちょっととした旅行みたいなもんだ。

いつでも行き帰りできるとはいえ、時空に与える影響は少ない方がいいに決まっている。入念な準備をしておく必要があるな。読みかけの漫画や小説、書きかけの論文を一纏めにする。

でも、せっかく巻き込まれてくれたのだ。才人の奴がどんな風に過ごしていくのか観察するのも楽しいかもしれない。

まあ、さすがに命の危険があつたら俺も参加するつもりだ。とりあえずのところは傍観させてもらうことにする。

たぶん、お前を助けるは俺のハルケギニア観光が終わるか、お前の生活に飽きるなり、俺の気分次第になるかもしれないが、頑張つて生きてくれ。

第一話 ハルケギニアへ〜どうやら従弟はまだ召喚されていないようです〜(前書

すみません。ちょっと大きく変更になります。

第一話 ハルケギニアへ〜どうやら従弟はまだ召喚されてないようです〜

けだるい感覚に身を任せながら俺は意識をまわりに向けた。

ここは深い森だ。当然ながら携帯は無反応だし、空気も地球のものとは違う。どうやら無事に転移できたらしい。毎度の事ながら異世界への転移魔法は好きになれない。先ほどまでいた世界とは違う空気に身体が弱い拒絶反応で少し身体が重たく感じるのだ。だからといって気にしていてもしょうがない事なので、今の内に情報を集める事を優先した。

懐から一冊の本を取り出し、軽くページをめくるが、中には何も書かれていない。そんな本の様子を気にすることもなくページをめくり続ける。だが、ページはいっこうに変化しない。

最初は気にしていなかったが、これだけページをめくっても無反応ということは

「はあ、とつとと起きろ。この寝坊精霊が」

「は、はい。今、起きます」

俺が本に向かって怒鳴りつけた途端、本が勝手に返事をしてページの合間からひとりの少女が現れる。フィギュアサイズのゴスロリ衣装を身にまとった少女はちょこんと座って俺からの命令を待っている。

見た目からは全く感じとれないが、この精霊はありとあらゆる知識を埋め込んで造られた精霊であり、世界そのものにアクセスして情報全てを読み取れるため、別名で『全知の書』と呼ばれている。

主以外からの命令には一切応じないプロテクトや他にも本が燃やされないための術式が多数組み込まれており、俺が所有している中でも、けっこう格式の高い宝具の1つである。本来ならば居眠りなん

てことは絶対にあり得ない。

訂正しておく、見た目はシステムの作り手である俺ではなく、同僚が趣味で手がけたものであり、気づいていけば絶対に阻止していた。しかも、性格までがどこか緩いところがある。俺としては有能な秘書をイメージしていたのに、全て台無しにされた。

そんなわけで、もう少し有能な精霊に作り替えても良かったのだが、見た目の冗談とは裏腹に喜怒哀楽がハッキリとした非常に人間らしいので、そのことを伝えた際に捨てられる子犬のような瞳で見られて以来、捨てるに捨てられなくなって現状までズルズルと使っている。

「リーネ、とりあえずハルケギニアの情報を教えてくれ」

リーネは先ほどまでのふにやつとした表情から真面目な顔になり、口調もそれに合わせたものになる。

「わかりました。

広大なハルケギニア大陸を中心とした世界で、大小多くの国家が存在します。

主には、トリスティン王国、ロマリア連合皇国、ガリア王国、アルビオン王国、帝政ゲルマニアの5ヶ国が挙げられます。

夜には赤と青の2つの月が浮かび、文化レベルは中世〜近世ヨーロッパのものに近いです。知つてのとおり魔法が発達しているので、魔法を使える者は貴族として敬われ、多くの人々は平民として暮らしています。でも、貴族には横暴な者が多いため、不満を抱いている平民も少なくありません。

信仰されているのはブリミル教、1つで中心はロマリアでハルケギニア中に信者がいるそうです。

ついでに東にはエルフ達が住む土地があつて人間はその場所をブリミル教の聖地と呼んでいるそうです。

「ここはその中でもガリア王国の首都、リュティス近郊です」

なるほど、典型的な異世界召喚というわけだ。情報を頭に入れながら頭を悩ませる。普通と違うのは魔王みたいな存在や世界征服を企むような国が無いことだろう。前は魔王が百人ほどいる異世界に召喚された少年もいたのだ。それに比べればマシと言える。

それより気になるのは大気中のマナの多さだ。いくら科学が発展していないとはいえ、この濃さはあり得ない。少なくとも地球では同じ程度の文明だったとしてもここまでの濃さにはならないはずだ。これだけのマナがあるならば魔法文明が栄えるのも理解できる。

「あの、ご主人様」

「どうした、何かあったのか」

「ご主人様の従弟の才人様はこの世界に現在のところ居ません」

「どうということだ」

一瞬、こいつが言ったことが理解出来なかった。ここがハルケギニアで間違いないことはこいつが自分で言ったのだ。それは既に才人が死んでいるということか。それとも、前提条件が異なっているのか。自分で考えておきながら、その意見を否定した。確かに彼の同僚は厄介事を持ち込んでくるが、実力は十分である。これが分からなくてもやっていけるほど俺達の組織は甘くない。使えなければ即座に切り捨てられる程の厳しさがある。

「その、記録では三ヶ月後にトリステイン魔法学院に召喚されることになっています」

どうやら時間の設定を誤ったらしい。確かに才人が召喚された同じ日付に設定したが、時間の流れに違いがあつたらしく、多少の誤差が出たとのことだ。しかし、いつ召喚されるのか分かるということとは

「世界の意思か。意外と面倒なことになりそうだな」

世界の意思とは文字通り世界が持っている意思のことだ。コレが強ければ世界そのものから干渉を受けることがある。意思を邪魔する存在がいた場合には世界から弾かれることもあるという。異世界召喚も多くには意思の通りに進ませるために人間に力を与えたり、微妙に時空の層を薄くするのだ。

「はい。しかも、かなり強力な意思があります。『ゼロの使い魔』という脚本が既に用意されています。変更する余裕はありますが、それでも大筋はほぼ決まっています」

どうやらかなり面倒な世界に巻き込まれたらしい。三ヶ月間をどのように暮らすか考える。いつそのこと時間移動する手段もあるが、場を整えるのが面倒だから却下だ。好き勝手遊ぶのもいいが貴族に目をつけられるのは避けたい。

そんな時だ。名案が浮かんだ。

無ければ盗ればいい。どうせ貯め込んでいる貴族が居るのだ。魔法で騙して財産を奪えばいい。唯人の魔法ならば容易く行える。首都ならば金持ち貴族の別邸があるに違いない。そこを唯人の家つてことにすればいい。

「さて、どいつを獲物にしようかな」

「ご主人様、いつも言ってますけど、盗みは犯罪ですよ」

唯人の表情と言葉だけで何を考えているか当てられるほど二人の付き合いは長い。

しかし、そんな良い子の意見など、唯人は求めていない。彼にとつて正義は自分が決めることだ。たとえ天罰が下るとしてもそれを受け入れる覚悟は既に出てきている。

今まで異世界に訪れた時も始めは金をチンピラから巻き上げたり、悪徳商人を襲って奪うことが大半でギルドなどで稼ぐのは奪ったものが無くなったときだ。

「どうせ使い切れないほどあるんだから、少しぐらい俺が盗ってもかまわないだろう」

「ご主人様の魔法なら金貨や銀貨を作れるし、今まで集めた財産もありますよね」

確かに、その方法もあるのだが

「リーネ、せっかくの異世界だ。普段出来ないことをやるべきだと思うわないか」

「そんなの盗みじゃなくてもいいじゃないですか」

「仕方がない。今回はリーネの言うことでも聞くことにする。だから、世界の脚本とやらをダウンロードしてくれ。それを読んでから行動を決める事にする」

「了解です。ちょっと待っててください」

さてさて才人はどんな風に世界の意思に巻き込まれていくことに

なるのやら、楽しみだ。

第二話 よく読めばイザベラって意外と重要人物じゃ？（前書き）

タイトルのごとく、コレが気になったのは私だけでしょうか？

第二話 よく読めばイザベラって意外と重要人物じゃ？

その日もイザベラは最悪の気分だった。

イザベラは父親であるジョゼフ王の名代としてグリゼルア公爵家のパーティーに嫌々ながら参加していたのだ。元々、乗り気ではなかったこともあり、大人たちが息子や娘がどれだけ魔法が使えるようになったか、自慢を始めた段階でイザベラの気分は最底辺まで落ちていた。

イザベラは父親と同じで魔法の才能がほとんどない。コモンマジックすら使えない父親ほどではないにしても、王家の人間としては間違いなく最低ランクの魔法使いだ。今でもドットクラスの得意属性さえ失敗することがある。

それに比べて2歳年下の従姉妹は既にトライアングルであり、その父親も12歳でスクエアになった天才であった。

小声で自慢をしている貴族たちはイザベラに気を遣っているつもりかもしれないが、あからさま過ぎて余計にイザベラを苛立たせている。

「無能なのは私が一番よく知っているんだよ」

イザベラとて全く努力してこなかった訳ではない。少なくとも普通の貴族の息子たちより多くの時間を費やしていた。しかし、結果は残酷である。努力した結果はほとんど実らなかった。

これ以上パーティーに参加していることに苦痛を覚え始めたイザベラは会場から少し抜け出すが、誰もイザベラに意識を向ける者はいない。逆に気を遣う必要がなくなり、大声で自慢している者までいる。

イザベラはため息をつきながら空を眺める。

この場所には彼女の味方はいない。分かっていたことでも、現実
に直面させられれば、彼女でも落ち込む。今のイザベラの表情は普
段の彼女を知る者がいれば驚くほど、決して見せることのない弱気
な顔をしていた。

本来のイザベラはそこまで攻撃的な性格ではない。彼女を変えた
のは二年前の出来事だ。

ジョゼフが王に選ばれた直後、叔父であるオルレアン公こと、シ
ヤルル王子が暗殺された事件。それにオルレアン夫人は従姉妹のシ
ヤルロットの代わりに毒で心を狂わせられた。さらには当時オルレ
アン公を支援していた貴族たちをイザベラの父親であるジョゼフ王
は一斉に粛正した。

どれもジョゼフ王が関係していたことから、今でも無能な兄が有
能だった弟を殺して王位を奪ったと囁かれている。

イザベラはそんな父親の乱心が理解できなかったし、理解したい
とも思わなかった。それ以上に周りが信じられなくなっていったのだ。
あれだけ仲が良かったはずの父親と叔父でさえ悲惨な事件が起きた
のだ。オルレアン公を慕っていた貴族に自分も襲われるかもしれない
いし、シャルロットは復讐で自分までも殺そうとするつもりだと信
じてしまっていた。

それ以来、シャルロットが死にそうな任務ばかり命じているし、
彼女自身もプチトロワから出ない生活が続いている。さらに、不幸
だったのはイザベラが全く仕事をしなくてもジョゼフは気にしない
し、期待もしていなかった。

「私は何のために生きているんだろうね。シャルロットは母親を治
すため、あの男は何を考えているのか分からない。私は何もしない
で、ただ喚いているだけか」

自分が動かなければならないのは分かっている。それでも怖いの
だ。ほとんど魔法を使えない彼女のことを多くの人間が馬鹿にして、

シャルロットの方が王女としてふさわしいと言う者がいる。

「だいたい魔法がそんなに偉いのかい。必要ないじゃないか」

イザベラは自嘲気味に笑ってみせる。

魔法なんて国家や領地を経営するのにほとんど必要ない。トップに必要なことは判断力など実務能力の方だ。戦闘は傭兵や騎士たちに任せればいい。土地を耕すのも土メイジたちに協力させればいい。せっかく努力して身につけた領主や王女としての実務能力も発揮する機会が与えられないため、ほとんど無駄になっている。

「何の音だい？」

ふと、森の中から声が聞こえてきた。声の感じから判断すれば若い男と幼い少女の声だ。始めは自分と同じように抜け出したのかと考えたが、少し違うみたいだった。

不安と興味で興味の方が勝り、声が聞こえるところまで足音を立てないように進んでいく。声から危険は感じられないし、そんな会話をしている見知らぬ人間に興味を持ったのだ。

森の中にいるのは見慣れない服装を身につけた青年だった。幼い少女の声らしいものを発していた者の姿が見られないことに疑問を覚えたが、それはすぐに解消される。

「ですからご主人様はこれからどうなさるつもりですか」

驚きで声が出そうになるのをぎりぎりでも抑えこむ。

話しているのは青年が持つ本、いや開いた本の間に座っている小さな人形のような少女だった。あんな精密なガーゴイルを彼女は知らない。

しかし、次の言葉でイザベラは完全に落ち着きを失った。

「そんなに気になるなら出てきたらどうだ」

その言葉はイザベラの心を青年への興味から恐怖へと引き戻す。自分は何をやっていたのだ。相手が暗殺者なら自分は今ごろ殺されていてもおかしくない。ただイザベラは身をすくめることしかできなかった。

side ユイト

近づいてくるイザベラの気配に俺は最初から気付いていた。『全知の書』を使わずとも俺にとって一人の心を読むことは大して難しいことではない。普段は使わないようにしているが、ここには俺の味方はいない。少しばかり反則技を使ってもかまわないだろう。そもそもイザベラのことを迎えるつもりで、自分に興味を持つように精神系の軽い魔法をかけていた。

リーネがダウンロードした『ゼロの使い魔』を適当に流し読みをした結果、一番興味をもったのが彼女だったのだ。虚無を使う人間たちで唯一子どもがいるのはジョゼフ王だけだ。その娘であるイザベラが魔法の才能がないことが不思議だった。虚無を使えるということはそれだけ始祖に近いはずである。始祖に近い男の娘でも、虚無ではない。ならば系統魔法で高い才能を見せてもおかしくないのにイザベラは大した魔法が使えない。

そこが不思議だったので、ぜひ本人と会いたいと願っていた。

「隠れていないで出てこい」

「あんたは何者だい？」

隠れても無駄だと判断したのか、イザベラはおとなしく出てきてくれたが、足が震えている。それを見ないふりをすることにして、ひとまず自己紹介から始めることにした。

「東方の魔法使いだ。エルフの土地を抜けてハルケギニアまで来た」

初対面の人間に実は異世界から来たと言って信用される訳がないので、それらしいことを言うておく。これは俺がこれから使う魔法のフォローのためでもある。もし見知らぬ魔法を使っても東方のものだと納得してもらったためだ。

「東方の魔法使いだつて？」

案の定、その部分に引つかかったらしい。

「そつだ。お前こそ誰なんだ」

既に知っているが、建前で聞いておくことにする。

「ガリア王女のイザベラ様だよ。あんたこそ名前を名乗ったらどうなんだ」

「そつだな。宮野唯人、いやハルケギニア風に言つなら、ユイト・ミヤノだ」

「何の用でここにいるんだい。ここはあんたみたいな人間が来れる場所じゃないんだよ」

「ハルケギニアの理屈なんか知らん。それに、俺は他人に命令されるのは好きじゃないんでな。まあ、せつかくの王女様との出会いだ。」

願い事があるなら叶えてやってもいいぜ。大抵のことならできるしな」

軽く腕を振って、手の上に金塊を作り出してやる。金を錬金できるのはスクエアクラスだ。しかも、大抵は小粒ぐらいらしいから、これだけで俺の凄さがわかるはず。いや、分かってくれないと困る。こっちは何としてもイザベラと手を組みたい。

「何者だ!!!」

「ちっ」

しかし、神は俺が嫌いらしい。見回りに見つかった。リーネを一旦本の中に帰らせて、相手に備える。

「イザベラ様、ご無事ですか」

「あ、ああ」

イザベラは突然の事態に何が何だか分かっていない様子だ。兵士はそれを勘違いしたのか、殺気をこちらに向けてくる。まったく早とちりも勘弁して欲しい。

「とりあえず邪魔だ。寝ろ」

金塊をしまつて軽い眠りの魔法で兵士の意識を奪う。すぐさま兵士は崩れ落ちた。見慣れない魔法に目を見開くイザベラを満足そうに見る。ハルケギニア式の魔法は詠唱もなく使うことが出来ない。これでわかりやすく教えられたはずだ。俺が普通とは違うことが。

「まあ、願いを叶えると言っても無償じゃない。俺もそこまで優しくない」

怯えているかもしれないが、これは間違いなく俺の本音だ。一方的に利用するつもりはない。

「な、何が望みなんだい」

「俺の望みは共犯者になつてもらふことだ。シャルロットのことも魔法のことも何もせずにいるか。見知らぬ人間である俺と手を組んで前に進むか。二択から選んでくれ」

本来なら二択ではないので卑怯かもしれないが、是非ともイザベラを仲間に加えたいので思考の幅を狭くさせてもらった。先ほど心を読んだ感じだとイザベラは追い詰められているはずだ。藁にもすがらる思いで俺を頼る可能性が高い。

「もし、もしだ。私が共犯者になればお前は絶対に私を裏切らないかい？」

しかし、卑怯な方法を使った自分を殴ってやりたい気分だ。

イザベラが追い詰められていると判断していたが、他人をここまですで恐れているとは思っていなかった。ここまで関わってしまった以上、こいつを放っておくことはできない。基本的に善人のつもりはないが、興味を持った相手を不幸にするつもりはない。自分が興味を持った以上は最後まで責任をとる覚悟くらいはある。

ぶつちやけた話、ここでイザベラが俺に見せている表情は凶悪だ。見捨てられるわけがない。そのせいで、元々は言つつもりが無かったセリフまで口から飛び出していた。

「いいだろう。俺は決して裏切らない。お前が強くなれる日まで俺は傍にいてやる。これは契約だ。だから、おまえも約束してくれ。必ず強くなってみせると」

予定では共犯者として世界を面白おかしく遊び回るつもりだったが、予定変更だ。いつそのこと世界に逆らってやるのも面白いかもしれない。

「約束するよ。私は強くなってみせる。だから、力を貸しておくれ」

イザベラも俺の言葉に強くうなずいて、握手を重ねた。

ここに異世界の魔法使いと魔法大国の王女との間に契約がなされた。これが後に四人の虚無に大きな影響を与えることを二人はまだ知らない。

第三話 トップに必要なのは政治力！！（前書き）

毎度ながら馬鹿な題名な気がしますが、これでも大真面目です。

本編はきつと時間が飛ぶことになりましたが勘弁してください。作者としてはあと二、三話で本編に入りたいんです。

第三話 トップに必要なのは政治力！！

あの後には話に乱入してきた兵士の記憶を念入りに消しておき、次の日に会うことだけを約束してイザベラと別れた。時間が許されるなら、もう少し話しておきたいこともあったが、これ以上イザベラをパーティーから離れさせておく訳にはいかないからだ。

そして、次の日には早速昨夜の間に考えていたことを彼女に伝えることから始める。ちゃんと事前に人払いと遮音魔法をかけることは忘れない。

「領主を私がやる？また急な話だね。王宮の方は放っておいていいのかい」

ついでに場所はイザベラの私室なのだが、想像していた女の子の部屋とは違った。とにかく女の子らしくないだ。飾ってあるのも高級品な置物ばかりで何の面白味もなかった。

「理由ならある。第一に、今のお前に協力者は皆無だ。王宮内で勢力を伸ばすのは難しい。

第二は王宮内はそもそも全ての仕事が埋まっている。新しく入れば誰かが辞めさせることになる。どうせ恨みを買っなら、もう少し勢力を大きくしてからにしたい。

第三だが、俺の素性が非常に面倒だ。いきなり王宮で雇うよりも地方で雇って腹心として引き抜いてきたみたいにワンクッション置いた方がごまかし易い」

「なるほど、確かにユイトの言う通りだね。それに私自身も王宮で

働くよりも自分の領地が欲しいと訴える方が通り易いと考えたんだね。また無能姫の我が侬と思わせるように」

「どうやらイザベラは魔法の才能に比べて頭の回転そのものは非常に良いみたいだ。どうやって領地を貰うのか俺が敢えて言わなかったにも関わらず、あっさり答えを出してしまっている。しかし、さすがにもう一つの理由まではわからなかったようだ。」

「まあ、これは付き合いが短い以上はしょうがないことだが、ガリアほどの大国全てを面倒みてやるほど俺はお人好しではない。せいぜい領地一個分ぐらいだ。さらに、できるかぎりトリステインやゲルマニアに近い方が才人たちに介入しやすいという目的もある。」

「まあ、領地そのものは私が何とかするけど、実際にはどうするんだい？二人だけで運営できるほど領地経営は簡単じゃないよ」

「そんなことは俺も分かっていることだ。しかし、それは問題ではなかったりする。まだイザベラには教えていないが、俺の手持ちの魔法や魔法具にも便利なものがあるのだ。リーネのような自動人形は俺たちの組織では必須で、俺もリーネ以外に自動人形を数体だけ所持している。主に俺は自分の研究や仕事の補助に使っているが、他のやつは自分が仕事をサボるために開発していた。しかも、どの自動人形も見た目にこだわりがあるオマケ付きだ。」

「ちなみにリーネの外見を作った奴は全ての自動人形にゴスロリを着せていた。他の連中も美少女やら美少年など、個人趣味全開で自動人形は作成されている。しかも、何故か外見がそんな自動人形の方が無駄に高性能だったりする。」

「そいつら曰く、「やつぱり作っている時の気合いが違う。人間はやりたいことをやるのが一番」らしい。俺からすれば、暇があるなら仕事をやって欲しい。俺も真面目ではないけど、自分の分はちゃんと自分でやっている。」

「その辺に関しては考えてあるから今は気にすることじゃない。イザベラが失敗した時のフォローと併せて考えあるから大丈夫だ」

今から失敗した時の話をされてイザベラは不機嫌そうだが、これは仕方ないと諦めてもらう。俺はイザベラの能力を知らないのだ。こればかりは実際に領地経営を始めてから修正していくしかない。

「なら、問題の領地はどこにするつもりなんだい？」

「俺としてはこの辺りがおすすめた。トリステインとゲルマニアに近くてリュティスとも離れている」

俺はかなりの領土を持つ貴族のちょうど間に空いている領地を指差した。ここは微妙にトリステインとゲルマニア国境と面しているが、ちょうど今は王領になっている土地だ。

これはもし貴族にイザベラが領地を持つことに反対されたとしても、王領ならばジョゼフ王の一任で無理を通すこともできる可能性もあるという俺の企みがあったりする。

「あの父が私に領地を持たせることを簡単に許すかい？」

イザベラは疑問を持つが、脚本を一通り読んだ俺はジョゼフ王の性格を知っている。何事にも執着をなくしたあの男ならば適当に許可を与えるであろうことを。しかし、今はそれを教える訳にもいかないのです、それらしいことだけを言うておく。

「許すだろうな。ここは微妙なんだ。国境だとしても特産が特にないし、森や元戦場の荒地ばかりで税収も絶望的なんだよ。トリステインとゲルマニアにとっても侵攻しても旨味がない土地だ。犯罪者

たちの寢床になっていそうな場所だよ。後は万が一に備えてイザベラが首都から離れる易いように他の貴族も予め金で買収してしまえばいい」

「分かったよ。何とかしてみる。でも、どうしてその場所なんだい？」

とりあえずは納得してくれたらしいが、次の疑問も最もなものだった。しかし、ここを選んだのも今のイザベラを納得させる理由はちゃんとある。

「さっき言った通りだ。情報伝達が馬や竜に頼る以上は近いほど便利だ。俺たちは国の機関を直接使えるような状況じゃない。そう考えると、この領地ならば他国の情報が手に入れやすいし、俺自身もロマリアにはできるだけ近づきたくないという願望が果たせる」

詳しく調べてみると、ブリミル教は異教徒を異常とも言えるぐらいに排斥しているのだ。新教徒と呼ばれる従来のブリミル教から分かれた実践主義者たちですら裏では容赦なく排斥し、表側でもそれとなく差別するほどである。他国にいる新教徒を他国の貴族に金を払ってまで殺させるのだ。まともな宗教団体が出来る行動ではない。いくら俺が東方出身の魔法使い（そもそも真つ赤な嘘であるが）だとしても、おそらく言い掛かりをつけるに違いないだろう。

きつと「始祖ブリミルから授かった魔法以外の何かを使う悪魔め」とか「ここは始祖ブリミルを信仰するべき土地だ。異教徒は去れ」言うに決まっている。そんな奴らとまともに相手をしたくない。

あ、一言誤解がないように言っておくと、俺は宗教そのものは嫌いではない。宗教の中には自然を崇める宗教もあれば、神を崇める宗教もある。俺は人それぞれが信じたいものを信じればいいと考えている。俺自身も有神論者ではあるが、神を崇める気は全くない。

ただ、宗教を利用して貧しい人間を食い物にする神官が大嫌いなだけである。

「なるほど。確かに神官どもはそういう部分があるからねえ」

イザベラも無事納得してくれたようなので、それ以上言う必要はなかった。しかし、ここまで酷い有様でも市民による革命が起きないのは幼い頃からのすり込み教育と、魔法の脅威だけなのだろうか。領地を得たときに少しばかり教育に手を加えて様子を見てみると良いかもしれない。

それから一週間ほど、俺はイザベラの部下に変装して各諸侯を訪れ、イザベラの我が俣振りを嘆いて領地に行かせるように根回しすることを依頼し、時には袖の下に金を握らせていき、イザベラはいつものように我が俣を言わせ、首都にいる人間を困らせる。

その結果、一月も経たないうちにイザベラが領主として派遣されることが決まり、首都にいる貴族たちを喜ばせることになった。謀略や暗殺が得意な上級貴族のことだ。犯罪者たちの寢床である領地でイザベラが死んでくれたら手を出す必要がなくて万々歳といったところだろう。

ほとんどの貴族はそれこそが俺たちの狙いであること気付かない。そもそも人間を魔法の実力で判断しようとするのが愚かだ。為政者に必要なのは魔法の腕よりも政治力である。いくら魔法が上手くとも、政治がおろそかでは王は務まらない。それを理解していない人間が多いのは本当に頭が痛い。脚本を読んでいるときも一番あきれたのはトリストインの貴族たちだ。『鳥の骨』とマザリー二を蔑

むが、彼でなければトリステインは既に潰れていたに違いない。これは脚本を知らないイザベラも同意見だったりする。彼らには貴族の誇りを言う前に自分たちの行動を客観的に見てから言うて欲しいものだ。

「うまくいったもんだね」

話を聞いたイザベラは部屋に帰ると、さっそく笑顔に変わる。その表情はまるで悪戯に成功した悪ガキみたいだ。俺の方も部屋から音が出ないように魔法をかけてから、今回の計画について話す。

「そりゃ、そうさ。イザベラの部下の振りをした時に、貴族の一部には魔法をかけておいたからな。こっちの魔法とは違う系統だし、バレル心配もない」

こっちにも似たような制約キアスという魔法があるらしいが、こっちは瞳が赤くなる欠点があるのに比べて、俺の魔法はそういう欠点はない。こういう時には知られていない魔法は便利なもんだ。

「ユイトの魔法にはもう驚く気にもなれないよ。バレル心配がないならどうでもいいしね」

俺が味方になると約束してやってからイザベラは急に強くなり始めていた。おそらく俺と出会う前ならば、こんなセリフは出てこなかったに違いない。たぶん、俺と出会う前にも魔法以外の能力は高かったであろう。でも、味方がいないせいで、自分に自身を持ってなかっただけなのだ。それに、俺としても強くなってくれた方がありがたい。

「でも、本番はここからだぜ」

まだイザベラには俺の正体を教えていないが、それも領地に行つた頃には教えるつもりだ。できるかぎり秘密は無しにしたいし、向こうに行けばやりたい放題にできる。もう少しの我慢になるが、今までの仕事を考えれば我慢できないことはない。

他にも、せつかく才人が来るまでに三ヶ月あるのだ。領地経営の他にもイザベラや平民に魔法を教えてみるのもいいかもしれない。本来ならば自分の魔法を未開や未発達の国に教えるのはご法度であるが、そこは袖の下や今まで貯めてきた功績、弱みを利用すれば少なくとも殺されることはない。どうせ過ごすなら楽しく自分が興味を持っていることをするのが俺のやり方なのだ。

そういう訳で、イザベラには今のうちに聞いておくか。

「イザベラ、ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいか？できれば正直に答えてほしいんだ」

「なんなんだい。いきなり」

「俺の使っている魔法だけど、使う気はあるか？」

イザベラは俺の言っている意味が理解できていないのか、キョトンとしてしまっている。さすがに急すぎたかもしれない。でも、こういうことは早いほうがいい。

「もう一度聞くからな。俺の使っている魔法をお前は使ってみたい意思はあるのか？イエスかノーの二択だ。さつさと答えてくれ」

「東方の魔法は私でも使えるものなのかい？」

本当は異世界の魔法だけだな。本当のことを言っていないことに

微かな罪悪感を感じるし、正直に話して更に追い詰めることになるかもしれないが、正直に話してしまう。

「その辺の実験も兼ねている。ハルケギニアの人間に俺たちの魔法が使えるようになるのか、実は俺もかなり興味があるからな。それでもイザベラが協力してくれるならありがたい」

ハルケギニア式の魔法は精霊を自分の魔力（こちらでは精神力と呼んでいるらしい）で無理やり操る非常に非効率な魔法だった。精霊がこれだけ大気中にいなければできない芸当である。

もし、そんな魔法しか使えない人間が精霊を使わない魔法を身につけたらどうなるのか知りたい。

「構わないよ。それぐらいなら協力してやるさ」

イザベラから返ってきたのは、そんな力強い返事だ。提案したのは俺だが、あまりにもあっさりした返事にちゃんと理解したのか不安になったぐらいだ。

「いいのか？使えないかもしれないのだぞ。俺としても初めての試みだ。うまくいくとは限らない」

「それなら別にいいよ。どうせ本来なら使えなかった魔法だ。そこまで執着するつもりはない」

「分かった。その覚悟があるなら構わない」

幸いなことにイザベラはかなり乗り気なようなので、魔法事故にだけ十分気をつけて教えていくことにする。それに、俺にも魔法使いとしてのプライドぐらいはある。やってみて駄目だったとしても、

少なくとも使えるレベルまでには魔法を使えるようにしてやりたい。

「向こうに行ったら領地経営と平行して始めるからな。当然ながら厳しいぞ、覚悟しておけ」

もちろん魔法を教えるからといって、領地経営の方も手を抜くわけにはいかない。

目指せ、『パーフェクト・イザベラ』

少し同僚の馬鹿に影響された気がしないこともないが、気にしたら負けだ。

「それに、たとえ実験でも魔法を使えるようにさせてくれるのを期待するぐらいなら構わないだろ」

挑発的な目でこちらをみるイザベラに当然のように言い返してやる。

「当たり前だ。教えると決めた以上は全力で使えるようになるためのサポートはするつもりだ」

第4話 準備万端？原作まで秒読み開始！！

さて、目当ての領地に俺とイザベラが来て二ヶ月ほどの時間が過ぎた。あれからイザベラは北花壇騎士団の団長を辞めており、ほとんどタバサ（つまりシャルロット）専属の上司という扱いに変わっている。俺はまだ深く関わるつもりがないので、イザベラにも存在をバラさないように頼んでいるが、話を聞いている限りでは脚本通りらしい。

あと、いろいろ大変なこともあったが、一々説明するのも面倒なぐらいである。

まずは領地に来たとき、あまりにもボロボロだった館や平民の家を見て思わず魔法で綺麗にしまったこと。そのせいで、やたら平民から崇められるようになるし、町に出るとき変装するのはデフォルトになってしまった。善意でやった訳じゃないから崇められても居心地が悪い。

次に平民を苦しめていた山賊や盗賊を退治したとき。一人一人捕らえるのも面倒だし、金に困っているわけでもなかったので魔法で一人も残さず一掃してやると、ティアルルの街には死神がいるという噂が立って賊たちは近づいてこなくなった。これまた領民の人気を上げることになり、さらに街を歩きにくくなった。後でメイドたちから聞いた話だと、噂をばら蒔いたのはイザベラらしい。本当に図太くなってきたことだ。

そんなことが何度かあったが、一番大変だったのはイザベラに俺の正体と目的を教えたときのことである。才人を見つけたら帰るつもりなのか、と泣かれてしまい、本当に困ったのは記憶にも新しい。結局、想像していたよりも早く世界の脚本を見せることになり、改めてイザベラは俺の計画に協力することになっていた。

「それにしてもイザベラに魔法を教える時間がないな」

イザベラは俺が想像していたよりも遥かに優秀だった。次々と案件を片付けていき、魔法が必要なこと以外の案件はほぼ成功している。しかし、優秀過ぎて仕事を任せまくったせいで当初予定していた魔法の訓練の時間が一切取れていない。

「そうだね。確かに領主の仕事は始めに想像以上に大変だけど、あんたが協力してくれれば早く終わると思うんだけど」

のんびり紅茶をすする俺を見ながらイザベラはハイスピードで書類を次々と片付けていく。

しかし、他人に今のセリフだけを聞かれると全く俺は仕事をしていないみたいに聞こえるが、一応だけど俺も自分にしかできないことをやってはいる。

まずはメイジ不足によって起こる案件のフォローには俺が飛び回っているのだ。重病人や重傷者の手当てや建設の手伝い、農地の世話まで幅広く仕事はしている。ほとんどが魔法を使って終わりなこともあり、必要な手続きや書類はイザベラに回しているので怒られるのも当然ではあるが。

他にも俺の異常さが伝わらないように領地全域に精神系の魔法を展開している。噂として流れるのは領民のために魔法を使う変わり者ぐらいで、異世界の魔法を使っていることはおろか、具体的な実力まで分からないようにしている。他の領地からの密偵が入っても、魔法領域のことならばすぐに分かるので綿密な記憶操作をして送り返しているため、今のところは怪しいとはほとんど思われていない。

「そもそも、今日来たのは俺の勤務態度を話し合ったためじゃないだろう。今日はイザベラがこの前付けてほしいと言っていたエアコンと冷蔵庫の件だ。とりあえず完成したけど、どこに取り付けたい

い？」

残念ながら俺は快適に過ごすことに慣れてしまっている現代っ子である。別に暑い訳ではないのだが、涼しく過ごしたいと思うことだってある。だから、俺は割り当てられた部屋にエアコンや冷蔵庫と同じ性能を持つ魔法具を取り付けたのだ。

それをたまたま俺の部屋に来たイザベラに見つかってしまい、イザベラの執務室や個室にも取り付けるように命令されたのは少し前のことである。

「まったく、そんなに便利な物があるなら早く出してくれれば良かったのに。早くアイスを私の部屋でも食べられるようにしてくれ」

「はいはい。しかし、魔法が生まれてから六千年も経っているのに平民が使える魔法具を発展させてないのは何て言えばいいのか分からないな。不便じゃないのか」

「始祖ブリミルから授かった魔法をそんなことに使うのは許せないつてのが教会の建前だけだね」

「相変わらずアホらしくて言葉も出ないぞ。しかし、そのおかげで平民が革命すら起こせないから、特権階級が潤うためのシステムになっっているわけだし悪い意味ですごいシステムだな」

貴族たちのあまりのアホさに涙が出てきそうだ。民主主義が当たり前の日本から来た身として彼らには上手く統治する自信がないなら辞めてしまえと言いたい。

「それはさておき、相変わらずメイジの数が少ないねえ。魔法関係はほとんどユイトの仕事になっているよ。これは本腰入れて外から

メイジを勧誘した方がいいかい？」

「いや、大丈夫だよ。魔法関係なら俺にできないことは少ないし。それよりも街の治安を守る方はどうなっている？」

「まだ駄目だね。治安そのものはユイトのおかげで大丈夫だけど、警備隊の訓練は終わってないし、何よりも経験不足だよ。この有様だと山賊とか現れたとき、ユイトに頼ることになる」

「やっぱり銃を開発した方がいいのか」

「言ったはずだよ。あんたの世界の銃では危険だし、兵器を生み出すのは止めた方がいい」

そう。俺が武器を作れることをイザベラに教えたとき、武器の製作だけはイザベラに止められていた。もちろん俺の方も分かってはいるので製作には取り掛かっていないものの、俺抜きで街を守れないという事態では困るのだ。

「完全に人材不足だな。裏方である部分は俺の自動人形とガーゴイルでも十分だが、表側にあたる部分の人材が足りていないよな」

「他の街から勧誘するのは難しいし、ティアラルではもう役に立ちそうは見つからないのかい？」

今、警備隊に入っている人間の多くは街で仕事がなくて困っていた若者たちだ。そして、指導者には退役して静かに余生を送っていた軍人やメイジに頼んでいる。そのためにも多くのお金が掛けられていたりする。別にお金の方は俺が今までに使い切れないほど貯めていた物を使っているので問題にはなっていないが、人材はうまく

いかない。今のところ街の人口は五千人ほどいる。しかし、その中には当然ながら老人や子供、女性も含まれており、既に職業についている成人男性も多い。

「仕方がない。なら、第二案でいこう。成人男性には仕事が休みの日に自衛のための訓練を受けてもらう。当然参加してもらったら、その分のお金を支払うことにしたらいい。そして、祭の時も特別手当を出すことにしよう」

「分かったよ。当分はその方向性でやっていけばいいんだね」

とりあえず仕事の方が一区切りしたところでメイドたちが二人分の紅茶を用意してくれた。メイドたちが出ていった後を見てイザベラは何故か不思議そうな表情をしていた。

「どうしたんだ？」

「いや、結局のところは平民から見れば誰が政治をしても関係ないのだと思うだけ。私は無能な姫って有名だったけどさ、こんなふうに平民にとって過ごしやすい政治をするだけで受け入れられているのがわかってね。結局のところ、魔法を気になっているのは貴族ぐらいなんだと思ったのよ」

「そりゃそうだろ。いくら魔法が上手くても政治が下手では意味がないし、魔法ができないならできる人を派遣してくれるだけで平民にとっては良い領主だ。今は外の勢力と戦っていた時代とは違う。その時ならば魔法が使えて民を守るような人間が理想的かもしれないけど、表向きでも平和になれば日々の暮らしを保ってくれる人間が理想なもんだ。そして、自分たちの暮らしに関係がないなら外で争いが起きても気にしないのが人間だよ」

俺も多くの異世界を回ってきたが、民にとっては日々の暮らしを守ってくれるのならば為政者など誰でも良いのだ。王女に憧れるのもアイドルの追っかけに近い。

本気で誇り高い人間に政治をしてほしいと考えるのは側近の身分が低い人間であることがほとんどだ。

俺の言葉にイザベラは複雑そうな表情を浮かべているが、それも諦めてもらうだけだ。そもそも、為政者とは本来ならば得をするような職業ではない。前提条件として民のために働いて当たり前なことを忘れてはいけないのだ。だから、普段に民よりも良い暮らしをすることが許されるだけ。そのことを間違えている者が多いのは人間は誘惑には弱い生き物であることの証明だ。

「そういえば、もうすぐ春の召喚試験じゃないのかい？」

「そうだな」

一応、既にイザベラには内緒で自動人形の一体を学院に忍び込ませている。何か変化があれば俺に伝えてくれるはずだ。

「そうだなって、従弟がメイジにボコボコにされるのを黙って見ているだけのつもりかい？」

イザベラは既に脚本を知っているの、才人がギーシュにボロボロにされることも知っている。

「どうせ決闘なんて貴族のお遊びでしかないだろう。いくら平民でも殺してしまえば、ルイズの実家が黙っていない。あれでも立場は使い魔だからな」

「そうかもしれないけどさ」

「せっかくの異世界召喚なんだ。才人にはこのくらいの試練は乗り越えてもらおうよ」

「それがユイトの主義だったわね。あのハーフェルフ用の集落は用意できたよ。近くの泉にも亜人が住んでいる場所だ。幸いなことに亜人のおかげで人は近くに住んでないし、街にもほどよく近いよ」

これは土くれのフーケを仲間に加えるための手段だ。本音を言うなら虚無を使うハーフェルフの方はどうでもいい。俺は虚無に下手な手出しは危険だと判断している。翼人などの亜人と仲良くさせた風景を見せて俺たちの心象を良くする作戦だ。こうすることで、先住魔法を使う亜人と腕の良いメイジを手に入れることができる。ハーフェルフの方は勝手に才人と仲良くなってくれたらいい。

ワルド、髭子爵ならアルビオンで死んでもらうつもりだよ。俺だって男だ。気分的にも側近は女の子の方がいい。それに脚本でも妖しげな動きをしていたし、彼の能力を甘く見ているつもりはない。彼自身の能力を考えれば髭子爵が油断しなければ、後々の不確定要素になりかねないと俺は思っている。

「俺の方も大丈夫だ。最近は魔法なしでも翼人が街に来て驚かれないくらいになっている。しかし、これも今まで山賊たちに脅えていた影響かもしれないな」

「どうということだい？」

「人間の方がもっと残酷なことを身をもって知っているからだよ。山賊は力で平民から物を奪うし、貴族は権力と魔法で平民を虐げている。人間とは違うけど、何もしいただけ翼人たちの方がマシらしい」

い
「

「つくづく人間は愚かだと思ひ知らされるね」

全くもって、その通りだ。

「もう一件のカトレアの方は後だな。才人とルイズの間に信頼関係ができてから向かうことにする。そうした方が後々楽になるしな」

こつちの目的は優秀なメイジを引き抜くことではない。トリステインの公爵家とイザベラの間を強めるためだ。こつすれば、もしジョゼフ王を倒してもイザベラを排除するのは難しい。こつするこゝとで間接的にロマリアを牽制することができる。

そして未だに迷っている分岐点もいくつか存在しているが、その都度何とかするつもりだ。

そうして運命の春の召喚試験を迎えることになる。

運命を何も知らない役者たち、そんな彼らを見守る運命の傍観者
異世界の気まぐれな魔法使いはハルケギニアの大地でどんな物語
を描こうとしているのかは本人も知らないことだったりする。

第4話 準備万端？原作まで秒読み開始！！（後書き）

次話にちょっとした番外編を挟みます。原作までもう少しお待ち下さい。

第5話 何事も予定通りにはいかないものだ(前書き)

少し投稿が遅くなりました。予定とは変わって、もう原作開始です。番外編を入れるつもりでしたが、もう少し後にすることになりました。

第5話 何事も予定通りにはいかないものだ

ブリミル歴6242年のフェオの月（4月）

場所はトリステイン魔法学院

今ここで学院の2年生候補が進級試験として春の使い魔召喚試験の儀式を行っていた。

学院から離れた草原で召喚試験の儀式は行われ、その風景を眺めている。イザベラも仕事に忙殺されながら、このシャルロットの召喚だけはちゃっかり見ていた。そして、脚本通りに風韻竜を召喚できたらしい。情報を読み取った限りでは脚本通りの煩い使い魔だ。

今回、俺がわざわざ直接訪れたのは学院に何人かの工作人員を忍び込ませるつもりなので、その下見も兼ねていた。

そして、それぞれの生徒は様々な使い魔を召喚している。

フクロウ、蛇、カラス、猫、バグベアー、スキュラ、ジャイアントモールなどなど地球でも見られる動物や想像上の幻獣と呼ばれる生物もうじゃうじゃいる。

シャルロット以外にポイントが高そうなのはキュルケのサラマンダーぐらいしかない。脚本通り、数少ないトライアングルだけあって、相応しい使い魔を召喚したようだ。

シャルロットが風韻竜を召喚したことに嫉妬を覚えたらしいイザベラを見て、魔法の学習を早める決断をさせられたのは完全な余談である。

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。5つの力を司るペンタゴン。我に従いし使い魔を、ここに召喚せよ！」

でも、俺自身もこのルイズという娘には驚かされていた。内包している魔力はこの世界のメイジの平均を軽く超えてしまっている。も

し、俺の世界にいたならば即座に勧誘されて適正ある魔術を調べ上げるだろうし、少なくとも虚無の可能性を疑うぐらいはする。非常にもつたいないことで、この保守的すぎる風潮はハルケギニアの悪い部分だと考えている。

そして、ついに我が従弟が召喚された。

ひらがさいと
平賀才人。現在は17歳で、高校2年生だ。

運動神経は普通。興味があることには打ち込むタイプだが、成績は並の並。でも、通っている学校はそれなりの進学校だから成績は悪いわけではない。

さらに、彼女いない暦〓実年齢で出会い系サイトに登録したばかりで、パソコンの修理が終わったところで召喚された。ついでに出会い系に関しては、俺があれだけ止めておいた方がいいと忠告してやったのに結局は彼女ほしさに登録したという裏情報も既に仕入れであるし、母親によく『もうちょっと先のことも考えなさい。そんなとこばっかりお父さんに似なくていいから』と言われていたことも知っている。

つまり、頭より先に体が動いてしまい、知識が多いわけで知能はそれほどでもない奴だが、それなりに正義感もある。まあ、思いこみの激しさと少し？スケベなところが欠点と言えるかもしれない。

しかし、俺が冷静でいられたのもそこまでだ。従弟の隣には見たことのない少女も横たわっている。あいつからの連絡で俺が話を聞いていたのは才人だけだ。つまり、報告にはなかった少女ということになる。

すぐに情報を少女から読み込む。イレギュラーになりそうな存在にはそれ相応の対応をしなければならぬ。彼女がどういう人間か早急に知る必要がある。

たかなぎはるな
高風春奈。才人とは同級生の少女で、当然ながら高校2年生だ。

彼女の詳しい情報は特に変わったところのないどこにでもいるような少女で、他人をフォローしたりすることが多いことぐらい。才人の歯止め役になってくれることぐらいだ。

視点を下に向けるとルイズは二人と契約しようとしていた。

これ以上見ていると俺にできることはありそうにない。少しでも早く帰ってイザベラと高凧春奈についての対策を考えなければならぬ。場合によっては誘拐する可能性も視野に入れて行動する必要がある。

side ; ルイズたち

才人が気が付いた時には、先ほどまでの秋葉原の面影は欠片も残っていない草原に座りこんでいた。そして、隣には自分に巻き込まれた春奈も横たわっている。身の回りを確認すれば、ノートパソコンを受け取った時の私服姿だ。

巻き込まれた春奈も自分たちの状況が理解できなかった。春奈は街中でたまたま出会ったクラスメイトである才人に声をかけようとしたとき、才人が銀の鏡に吸い込まれそうになっているのを助けようとしたことぐらいだ。それが今はどうして草原みたいな場所にいるのか分からない。

そして、何がどうなっているのか分からない内に、春奈は初対面の少女にキスされたことに動揺して突き飛ばしていた。すぐ後に才人も同じようにキスされ、すると急に左手の甲に痛みが走る。呆然としている間に、春奈はよく事情が分からないままにルイズに殴られて気絶してしまった才人がコルベールに魔法で運ばれているのを見て、ようやく自分が今まで生きてきた世界が違つと認識できた。

「そうなんですか」

春奈からすればハルケギニアについて説明されても、それぐらいしか言えない。春奈にとつて幸いにもコルベールは平民だから差別するような人間ではなかったたので落ち着いて状況を理解することができた。

しかし、分かったことも多いと言えない。ただハルケギニアは自分たちの住んでいた地球とは違うらしいこと、文明レベルは中世で止まっていること、ここは貴族や王族がまだ現役で国を治めていることなど、現代の考え方が全く通じないことだけだ。自分たちを召喚してみせたルイズに関して春奈が分かったのは今まで魔法が一回も成功したことのない落ちこぼれであることぐらい。何とか周りを見返そうと努力しているのでコルベールからは仲良くするように頼まれたが、それは難しそうだ。

コルベールとの話の話題になっっている才人を気絶させたルイズは春奈たちに目を向けずにブツブツと何事も呟いている。その様子はすごく不気味でどう接すればいいのか春奈には分からない。

「異世界か。そんなのはお話の中だけだと思っていたのに」

空にある地球では見ることができない二つの月を見ながら春奈はぼんやりと呟いていた。

三人がルイズの部屋に戻ると、才人は早速ルイズと口論になっていた。春奈はそれを見ていることしかできない。思った以上に頭が混乱しているから、下手に口を開くとルイズを傷つけるだけだと思っただけだ。

「それほんと？」

部屋についてから才人たちの事情を話しても、ルイズは才人の言っただけをまるで信じようとしなかった。

「嘘ついて何になるんだよ」

しかし、才人は盛大にやらかしてしまっただと考えていた。要らない好奇心など捨て、無視して家に帰ってればよかったのだ。どうやら月が二つあるらしい。そして、魔法使いがいる。

この二つがさっきまで俺のいた地球とは決定的に違う部分だった。今頃、両親は心配しているだろうなと思うと、悲しくなる。

次々と聞かされる話に才人は大きいため息をつく。春奈のことを気遣う余裕もなかった。

「信じられないわ」

「俺だって信じられんが、月が二つもあるんじゃないや信じろしかねえんだよ」

「それって、どういうこと？」

「俺の居たところは、魔法使いなんていないし、月も一つしか無かった」

少なくとも才人は魔法使いなんか今までに見たこと無い。唯人に關しても変わった従兄だという認識しかない。

「そんな世界、どこにあるの？」

「だから俺がいたところだつての！」

いくら才人たちがルイズに説明しても意味ない。まず、ルイズはこつちを平民とか言っただけで否定しかないし、そちらの常識だけで判断されても困るのだ。才人たちも常識が壊されたばかりで混乱して

いる途中である。

「怒鳴らないでよ。平民の分際で」

「誰が平民だよ！」

あまりにも才人たちを見下した言い方が余計に才人の考える余裕を奪っている。

「だって、あんたメイジじゃないんでしょ。だったら平民じゃないの」

「なんなんだよ、そのメイジとか平民とかいうのは？」

「もう、ほんとにあんた、この世界の人間なの？」

「だからさっきから違っつて言ってるだろ」

話は堂々巡りでまったく決着がつかない。春奈の方は自分が異世界の人間であること諦めている。人間の固定概念はそれほどまで強固なのだ。

「お願いだ。そろそろ、家に帰してくれないか？」

「無理」

「どうしてだよ？」

「だって、あんたはわたしの使い魔として、契約しちゃったのよ。あんたの話通りに別の世界とやらから来た人間だろうが、一回使い

魔として契約したからには、もう解除できない」

「ふざけんな！」

「わたしだってイヤよ！なんであんたみたいな平民が使い魔なのよ！」

「だったら帰してくれよ！今すぐに！俺は困っているんだよ」

「ほんとに、別の世界から来たっていつの？」

「ああ！」

「なんか証拠を見せてよ」

証拠になりそうなものは才人にとって1つぐらいしか心当たりがない。鞆からノートパソコンを取り出す。

「なにこれ」

「ノートパソコンだ」

これならば絶対にファンタジーの世界には無さそうな物である。ようやく納得してもらえはらずと才人は確信していた。

「確かに、見たことがないわね。なんのマジックアイテム？」

「魔法じゃねえ。科学だ」

才人は口で説明するよりも、見てもらった方が早いので、とりあ

えすスイッチを入れた。

「うわぁ。なにこれ？」

「起動画面だ。これぐらいで驚くなよ」

「綺麗ね。何の系統の魔法で動いてるの。風？水？」

「だから魔法じゃねえつつに。科学だ、科学。電気だよ」

「デンキって、何系統？ 四系統とは違うの？」

「あぁもう！ とにかく魔法じゃない。そこを理解しろ」

「ふーん。でも、これだけじゃわかんないわよ」

「なんでだよ？ こういうの、こっちの世界にあるのか？」

結局、ノートパソコンも魔法の道具としてしか認識されず、才人がイライラした声で言えば、ルイズは唇を尖らせた。そんなルイズを一瞬だけ可愛いと思ってしまったのは男としてしょうがないと思う。けど、いい加減信じてもらえないのは才人にとって面倒だ。

「ないけど……」

「だったら信じろよ！」

「わかったわよ！ 信じるわ！」

「ほんとか？」

もの凄い疑わしかった。才人たちはさっきまでの態度からだと全く信じられないでいる。

「だってそう言わないと、あんたしつこいんだもん！」

「まあ、わかってくれればいい。じゃあ、さっさと帰せ？」

「無理よ」

「なんで!？」

ルイズは困った顔になる。

「だって、あんたの世界と、こっちの世界を繋ぐ魔法なんてないもの」

一瞬空気が止まる。才人はルイズが何を言っているのか少しの間、理解できなかった。春奈はすでにコルベールから話を聞いているとはいえ、この話題には頭を抱えるしかない。

つまり、もしハルケギニアから召還されたとしても自分が住んでいた場所の詳しい位置を知らなければ帰ることはできないのと同じだ。

「じゃあ、なんで俺はこんな所にいるんだよ！」

「そんなの知らないわよ！」

才人とルイズは相変わらず怒鳴りあっている。何とかしなければいけないと思いつつも、春奈も今の二人を落ち着かせる術はない。

「あのね。ほんとのほんとに、そんな魔法はないのよ。大体、別の世界なんて聞いたことがないもの」

「召喚しといて、そりゃないだろ！」

「召喚の魔法、つまり『召喚サモン・サーヴァント』は、そもそもハルケギニアの生き物呼び出すのよ。普通は動物や幻獣なんだけどね。人間が召喚されるなんて初めて見たし、異世界なんて信じられるわけ無いでしょ」

「召喚したのはお前じゃねえか。だったら、もう一度、その召喚の魔法をつかってみる。鏡を通れば帰れるかもしれないだろう」

「無理よ。『召喚サモン・サーヴァント』は呼び出すだけ。あの魔法はこつちに呼び出すだけで、使い魔を元の場所に戻すことは出来ないわ」

「いいからやってみろよ」

「不可能よ。今は唱えることすら出来ないもの」

「どうしてだよー！」

「『サモン・サーヴァント』の発動条件はね」

「うん」

「詠唱するメイジに、使い魔が居ないことが条件なの。たとえば、前の使い魔が死んじゃった、とかね」

「なんだと?」

「あと、左手のやつは使い魔の証だから」

「なに?」

「だから、わたしの使い魔ですっていう、印みたいなものよ」

「ち、これ以上言い争っても仕方ない。俺はしばらくお前の使い魔になってやるよ」

才人たちにはそれしか残されていない。帰るにしてもこの世界について知らないとどうにもならないからだ。

「なによそれ」

「なんだよ。文句あんのか?」

「口の利き方がなってないわ。まずは呼び方ね。『ご主人様』でしょ?」

「そんな風に呼べるか。でも、使い魔って何すりゃいいんだ?」

才人にとって使い魔をやるだけでも譲歩しているつもりなのだ。

口調まで口を出されたくない。

「まず、使い魔には主人の目となり、耳となる能力が与えられるはず」

「どづいづこと？」

「使い魔が見たり聞いたりしたものは、主人にも見えたり聞こえたりすることが出来るのよ」

「つまり、プライバシー皆無ってことか？」

「大丈夫よ、あんたたちじゃ無理みたいだから。わたし、何にも見えないし聞こえないわよ？」

「そうか、そりゃよかった」

「よくない！まあ、人間がこんな能力持っても使い道ってそうそうないわね。次」

「普通の使い魔は、主人の望むものを見つけてくるのよ。秘薬とかね」

「秘薬って何だ？」

「特定の魔法を使う時に必要な触媒のことよ。火の秘薬の硫黄とか、特殊なコケとか」

「へえ」

「これもあなたには関係なさそうね。秘薬の存在すら知らないんじゃないし」

「まあ、無理だな」

才人たちもある程度は化学とか生物で習ったこともあるが、異世界に同じ植物があるとは思えない。

「次」

ルイズは苛立たしげに言葉を続けた。

「これが一番重要なんだけど、使い魔は、主人を守る存在でもあるのよ。その能力で、主人を敵から守るのが役目。これもあんなたちじゃ無理よね？」

「人間だしな」

才人自身は剣道とか柔道とかは従兄に言われたこともあって少しはやったことがあるけど、敵と戦えるほどのものじゃない。春奈の方は喧嘩もしたことがないくらいだ。

「あんなたちが強い幻獣だったら並大抵の敵には負けないけどね」

「うっせ」

「だから、あんなたちにできそうなことをやらせてあげる。洗濯、掃除。その他雑用」

「ざけんな。見てるよ、そのうち絶対帰る方法を見つけてやるぞ」

「そうしてくれるとありがたいわ。あんなたちが別の世界とやらに消えてくれれば、わたしもすぐにでも次の使い魔を召喚できるから」

「んにやる」

ルイズの態度は完全に才人たちをなめている。

「はあ。しゃべったら、眠くなっちゃったわね」

ルイズは手を口に当て、小さくあくびをした。

「俺はどこで寝たらいいんだ？」

ルイズは、床を指差した。そこには藁が敷いてあるだけだった。

「犬や猫じゃないんだけど」

「しょうがないじゃない。この部屋にベッドは一つしかないし、ハルナならともかく一緒のベッドで寝るわけにはいかないわ」

そう言いながらも才人の分の毛布を一枚投げてよこしてくれるだけ、マシだろう。まあ、貴族の部屋の床のせいか綺麗に掃除されている。

ため息をついてそれを広げていると、いきなりルイズがとんでもない行動に出た。ちらっと、ルイズのほうに目をやったら、ルイズがブラウスのボタンを尽く外して脱ぎ去ろうとしていた瞬間だった。すぐさま、春奈は才人の目を押さえる。

「な、な、なにやっているの」

「なにつて、寝るから着替えてるのよ」

「平賀くんが見てないところで着替えなさいよ」

「なんで？」

「なんでって、まずいでしょ」

現代の価値観で動く二人にとってルイズの行動は信じられなかった。

「わたしは別にまずくないわよ。使い魔たちに見られるぐらい気にしないわ」

俺はペットと一緒にか？才人がそう言おうとすると、何かが飛んできた。春奈が手に取るとそれはルイズの制服と下着だ。

「あ、それ明日になったら洗濯しといて」

「ちょっと待て。平賀くんは男だよ」

「男ね？使い魔でしょ。私は気にしないと云ったわ」

「それでも常識ってものがあるでしょ？」

すっかり才人は置いてけぼりで春奈とルイズの口論は激しくなる。

「あんたたちは私の使い魔でしょ？それに役に立たないなら掃除、洗濯、雑用ぐらいは当然じゃないの」

「ふう、分かったわ。私たちも頭を冷やしたいから外に出てもいいかしら？」

「ちゃんと戻ってきなさいよ」

ルイズから許可が出ると、春奈は才人の腕を引つ張って部屋の外に出た。

才人と一緒に部屋から出た春奈はルイズの部屋からある程度離れたところで、まず才人が気絶している間に聞いた話を彼にも聞かせる。

「つまり、俺たちの立場を守るためにも、ルイズの使い魔をやるしかないのか」

この世界では平民の立場は家畜と変わらないくらい弱いことや、その中でもルイズはマシな貴族らしいことを伝えられて、才人は信じられない気持ちでいっぱいだったが、春奈が集めた情報を否定する根拠もない。自分と同じ立場の彼女が自分を騙すメリットもなかった。

「うん。後はね、何故か貴族なのにルイズさんは一つも魔法が使えないから周りにコンプレックスを感じているってことも理解してあげてほしいの。呼び出された私たちにとっても迷惑な話だけど、彼女にとっても周りを見返すために努力していたらしいから」

春奈が順序を整理して話をしてやれば才人も落ち着いてきたらしい。感情に任せてルイズを怒鳴ったことを今さら後悔しているみたいだ。本来は彼も悪い人間ではない。見知らぬ土地に呼び出されて混乱しているだけなのだ。春奈もたった一人ならば、才人と同じようにルイズに怒鳴っていたかもしれない。

「とにかくここは地球とは違う。俺たちの常識も通じない。貴族に対して平民の扱いは酷い。しかも、帰れない可能性は大。マジで最悪の状況だよな」

「とりあえず私たちにできることは周りとの間に、波を立てないようにつることだと思ふの。くれぐれも問題は起こさないこと」

「わ、分かったよ。その辺は高風を頼らせてもらっていいか？」

才人自身、先ほどまでルイズと口論していた身なので春奈に対して強く出られない。

それに対して、春奈は自分でも驚くぐらいにハルケギニアに順応していた。それには理由があつた。本人は意識していないが、元いた地球で高校生活を過ごしていたときも他人をフォローすることが多いので、才人と違って空気を読むのが上手い。

才人の方も春奈の話を聞いている間に、何とかなるかと前向きに考え始めていた。

こうして地球人二人のハルケギニアでの生活は幕を開けることになる。

第5話 何事も予定通りにはいかないものだ(後書き)

予定とは違う二人召還。ネタばれになりますが、wikiを見て思いついてやってみました。だから、春奈の方は才人とは異なる能力を持ちます。

第6話 イザベラの魔法！〜秘密の特訓の巻〜（前書き）

ついにイザベラ様の使える魔法が明らかに！？
期待はずれならごめんなさい。

第6話 イザベラの魔法――秘密の特訓の巻――

「召喚された人間が二人ね。いきなり脚本から外れていないかい？」

「まあな。そのせいで予定とは全く違う道を進んでいくことになるかもしれない。けど、俺たちが取るべき道は脚本に焦点を合わせることは変わらないぞ。他に質問はあるか？」

唯人がイザベラに結果報告をすれば、イザベラは少し考え込んでから唯人に問いかける。

「結局、刻まれたルーンはどうなったんだい。二人とも同じルーンってことは一緒の能力に目覚めたことになる。つまり、能力は本来の半分になったのか、それとも二人が本来の能力を發揮できるのか。そこが問題たる？」

「それに関してだが、もう推測ぐらいならある。まだ確信がないから言つつもりはないけど、明日の決闘時にでも俺が確認してくれるから気にするな。そして、実は言い忘れたが、そんなことよりももっと大事なことがある」

唯人は明日の決闘までにはトリスティンまで戻るつもりだ。やはり、マジックアイテムを通して見るのと生で見るのは判断材料としても違うし、裏で進めている帰ってくる時に思いついた計画を実行するためにイザベラも引つ張り出さなければならぬ。

脚本通りに進ませることよりも大事なことがあったかどうか頭を悩ませるイザベラを見て、報告前に唯人が用意しておいたマジックアイテムをイザベラの前に置く。

「なんだい、これは？」

「これは亜空間を作り出す専用のマジックアイテムだ。時間がないからな。今からこの中に入れてもらって、イザベラの魔法トレーニングを行うことにした」

「ちょっと待ちな。私が処理しなければならない案件が多くて手が足りないぐらいだよ。最近は家督を継げない貴族や元貴族もそれなりに集まっているし、楽になった部分はあるけど、その分だけユニットの自動人形を減らしている現状にそんな時間はない。これでガリア北部を手に入れることができるのかい？」

近頃は保守的ではない貴族も集まり、ティアラルの中央では自動人形の出番はなくなっている。まだ街から離れたところにまで目が届くようになっていないので、完全にお払い箱ではないものの思った以上にイザベラに賛同する人間が多くて驚いたのは記憶にも新しい。

はつきり魔法をやっている時間がないと言うイザベラに唯人は指を振って否定する。彼だって、そのぐらいなら理解しているのだ。唯人自身もまだ隠している奥の手を使うつもりはない。

ならば、どうすればいいのか。

答えは簡単である。時間が無ければ、時間を作ればいいだけだ。唯人が今回持ってきたマジックアイテムはその代表格とも呼べる物であり、わずか一時間を一ヶ月まで延長させる優れ物だ。これならば時間を気にせずに訓練できるのだが、問題点も存在する。あくまでハルケギニアでは一時間だけで、身体そのものは一ヶ月の時を過ごしているため、使い過ぎれば普通に老いていくので、イザベラにオススメできなかったのだ。

しかし、その話を聞いたイザベラの反応はあっさりしたものだった。

「自分の精神だけで訓練はできないのかい？魔法は精神の産物だから、肉体的に強くならなくても構わないって言っていたら？」

その話を聞いた唯人が後に改造を施すことになるが、今回はそのまま使うことになった。

初めて異空間と呼べる場所に来たイザベラとしては拍子抜けの一言だった。どう考えても訓練するような場所には見えない。砂浜や海、近くに小さな林もあり、別荘らしき建物まである。どう考えても貴族の避暑地である。

「本当にここで合っているのかい？」

「合っているぞ。中身は自由に変えることができるから前に来たときの設定だけだな。この場所に関しては置いておくことにして、まずは適正を調べるから本に手を乗せてくれるか」

唯人はいつも持っている『全知の書』にイザベラが手を乗せると、リーネが姿を現す。イザベラは少しは驚いたが取り乱すことはなかった。始めこそ唯人が何もないところから自動人形を出したことに驚いていたが、今では唯人なら何でもありだとある意味達観してしまっている。

「じゃあ、リーネ。イザベラの情報を読み込んでもっとも適正のある魔法を教えてくれ」

「了解しました、ご主人様」

リーネはイザベラの手に触れて情報を細かく読み取っていく。触られた瞬間、イザベラはピクツとしたが、それ以外はおとなしくしていた。

唯人はイザベラがうまく魔法を使えない理由に別のものがあると感じていた。ティアラルに来る前、一度だけ使ったイザベラの魔法を唯人なりに解析した結果では別の魔法の才能がハルケギニア式の魔法を妨害しているように見えた。

そのため、リーネに詳しい解析を頼んだのだ。唯人自身も魔法の才能を解析するのは可能だが、その能力は『全知の書』であるリーネには及ばない。

「解析が完了しました。イザベラ様の適性は確かにハルケギニアの魔法です。しかし、何らかの妨害があります。これは精霊みたいで、精霊がイザベラ様の魔法を妨害していますね。ご主人様の想像通りで、妨害している精霊はハルケギニアの精霊ではありません。そもそも四大精霊しかいないハルケギニアは世界の構成が崩れていくはずで、それが今まで無事な理由は聖地に放置されているゲートから他の世界の精霊を取り込んでいるためで、闇と光を中心とした精霊たちをハルケギニアに閉じ込め続けています」

リーネに言われて改めて精霊を見る力を強めると、闇の精霊が集まっていることがわかる。イザベラが不安や恐怖などを感じたため、闇精霊が自動的に集まっているのだ。いつもの唯人なら気づいていてもおかしくなかったが、転移したばかりで感覚がボケていたことと唯人と知り合って不安などが軽減されたため、分かるほどの精霊の数が集まっていなかったのだ。これについては完全に唯人の不注意といえる。

「ど、どういことだい？」

イザベラの疑問はよそに、唯人は何故ハルケギニアの人間が別の精霊魔法を使えるのか疑問に残るが、まずは説明責任を果たすことにした。

「簡単な話、世界の調和は火と風と水と土だけでは成り立たない。他にも光や闇といった精霊もこの世界には存在している。大抵の異世界では明らかになっていることなんだが、ハルケギニアでは常識ではないみたいだな」

「うん？」

唯人の説明に、いまいち理解できていないイザベラ。やはり常識の壁は大きいようで虚無を含めた五大属性で世界が成り立っていると教育されているせいだろうか。

それに、最初こそ理解できなかった唯人ではあるが、彼の方も冷静になって考えてみればいくつかの仮説を立てることもできた。それはごく単純な理由だ。おそらく何らかの事故などで、別世界の精霊魔法の使い手が迷い込んでしまった可能性だ。ハルケギニアでは何故か地球から物が来ることもあることはすでに分かっている。それなら、別の次元と繋がっていてもおかしくない。

そして、その魔法使いは無事に結婚して子孫を残したのだろう。その魔法使いがどれほどの実力を持っていたのかは分からないが、ハルケギニアの血筋と交わった結果、イザベラのところでは完全に開花したのだ。俗に言う先祖帰りしてしまったに違いない。

こうなると不幸の一言しか言えない。運命や脚本抜きで考えた確率だと才人が召喚されたのも何億分の一以下だし、イザベラが四大精霊ではなく、たまたま闇精霊の使い手としての才能を見せたこと

も何億分の一以下だろう。

「そこまで深く理解する必要はない。今はお前の知らない精霊もいることを覚えているだけでいい。そして、お前が魔法を使えない理由は五大属性に適していないことも覚えておけ」

「なるほど。それで私が使える魔法属性はなんだい？」

「イザベラ様の属性は闇ですね」

「らしいぞ」

この理由は理解できる。イザベラの性格ではどう考えても光はありえない。

「ふうん。どうすれば使えるようになるんだい？」

イザベラの質問に唯人は頭を悩ませる。闇の精霊魔法を見せるのは難しい。そもそも光属性と闇属性は普通の精霊魔法とは違う。しかし、唯人は深く考えることを止めた。

ただ精霊に呼びかけ、自らの影に集める。

「『我が影に集いし精霊よ。影に力を与えよ。シャドウ・ダンス』」

すると、唯人の影は独りで立ち上がり、唯人の隣に立つ。それを見たイザベラは感嘆の声を上げる。初めて見る魔法に驚きを隠せないでいる。今まで唯人が使っていた魔法も非常識な物が多かったが、今回の驚きは今までの比ではない。今、唯人が使った魔法こそが自分にある才能ということになる。イザベラは普通と違うことに少しばかり落ち込むが、すぐに気を取り直していた。

元々、従妹と比べられて無能だと馬鹿にされていたのだ。今さらハルケギニアの魔法に拘る必要はない。簡単な話なのだ。運動の才能がなくて、勉強に才能がある人間のように自分にはハルケギニアの精霊ではなく、こちらの精霊を扱う才能があるのだと割り切ってしまう方がいい。

「これが闇魔法」

「これは単純な魔法のひとつだな。影を使った魔法は闇魔法の基本だ。他にも影を刃にして飛ばす魔法や紐などにして抑える魔法もある。難しい魔法はもう少し後になってから教えるから、とりあえず今言った三つの魔法を覚えてくれ。ルーンで唱える必要はないが、その分イメージを明確に持つ必要がある。まずはシャドウ・ダンスからやってみる」

「分かった。やってみる」

イザベラは杖を持って、意識を集中して精霊に呼びかける。影に集中させるイメージを持たせながら口語で詠唱を開始する。

「我が影に集いし精霊よ。影に力を与えよ。シャドウ・ダンス」

イザベラの影は立ち上がろうとするが、途中で崩れ落ちて元に戻る。初めての魔法ならこんなものだろう。唯人は目に魔力を集中して精霊を見る。イザベラの干渉力の強さに驚いていた。精霊の数そのものは魔法を使うのに十分に集まっているが、制御が甘い。そのせいで魔法が途中で途切れてしまったのだろう。

「いまのところはこんなものだが、上手く集中できるようになれば杖もなく魔法が使えるようになる。頑張って精進しろ。精霊魔法は

感覚に頼ることが多い。それも闇や光になれば余計にだ。後は訓練を重ねて闇の精霊の感覚と制御を覚える。まずは倒れるまで使ってみる」

そもそもハルケギニアの精霊とは違うので杖は本来なら始めから必要ない。しかし、魔法を使うというイメージをしつかりさせる意味でも始めは杖ありで訓練させるつもりであった。

それに口調や訓練こそ厳しいが、唯人はこれでもかなりイザベラのことを考えて行動している。

実は唯人にとってイザベラは人生で二人目の弟子みたいなものなのだ。一人目はたまたま知り合った時に少しかり助言を与えた程度なので、本格的な弟子はイザベラが最初である。そのため、普段の態度からは分かりにくいのが、イザベラの身体にかなり気遣っている。

イザベラが執務を終わらせて寝るときには安眠と疲労回復の魔法をかけてやったり、普段の料理や休憩時のお菓子や紅茶などにも疲労回復用の魔法薬を惜しみなく使っており、これまで主要な人材がイザベラのみだったにも関わらず、身体を壊さずに済んだのは唯人の影の努力があったのだ。

「『我が影に集いし精霊よ。影に力を与えよ。シャドウ・ダンス』」

イザベラの影は先ほどよりも形になっているが、すぐに崩れ落ちてしまう。

すぐにイザベラは自分の中のイメージと今の魔法の違いを意識しながら再び魔法を行使した。

「『我が影に集いし精霊よ。影に力を与えよ。シャドウ・ダンス』」

何度か使つうちに影は完全にイザベラの姿になることが増えてい

き、継続時間に関しても伸び始めていた。始めは一秒すら持たなかった影が今では十秒近く継続して使えるようになっていた。

いくら幼いころから精霊魔法を使い始めたとしても、これは異常な進歩だといえる。ハルケギニアでは元々精霊を使った魔法を使っているが、闇精霊は四大精霊よりも制御が遥かに難しいし、ハルケギニアの精霊ではない。つまり、ハルケギニアの人間とはお世辞にも相性がいいとは言えない。それをイザベラは開始してから数時間でまともに扱えるようになってきている。これは精霊魔法の使い手として恐ろしい才能だ。

「無知とは哀れだな。しかし、知らないからこそ威張っていられるのだから知らない人間にとっては幸せか。もし俺より強い人間を新たに知っているなら俺なら落ち着いてはいられないな」

自嘲気味に笑いながら、唯人は言わずにはいられなかった。虚無のジョゼフ王に闇のイザベラ王女、二人とも知らないままなら無能で生涯を終えるはずだった。それが王となることで、唯人と出会うことで二人はそれぞれの属性に目覚めた。それも、普通とは違う力にだ。

唯人よりも強いだけの魔法使いならば他にも知っている。しかし、それだけだ。相手が自分よりも強くても強いと知っていることは便利だ。だが、例え相手が自分より弱かったとしても、それを知らないということとは唯人にとって脅威だと考えている。

唯人が考え事をしている間にイザベラは何とか制御に成功していた。しかし、始めは簡単に考えていたイザベラも使っている間に難しさを実感している。今まで使っていた魔法と違って精霊が自分と会話しようとしてくれるので意思疎通ならできるのだが、精霊は自由すぎる。いつせいに制御できなければ好き勝手に何処か行ってしまふのだ。

「ちゃんと言うことを聞きな」

しかし、本来なら精霊と意思疎通できることに疑問を抱くはずなのだが、他とは違う魔法を自分だけが使えるという感覚がイザベラにそのことを忘れさせていた。唯人もそれをほほえまじげに見ながらイザベラが魔法を使う様子を見守り続ける。

訓練は日が暮れて夜になっても行われ、館でイザベラは寝るまで魔法を使い続けていた。

ちょうど一月が経ったころには唯人が始めに言った三つの魔法を杖なしでも完璧に使えるようになり、他にも唯人に教えられた魔法を何種類か使えるようになっていた。

第6話 イザベラの魔法―秘密の特訓の巻―（後書き）

ようやくイザベラの魔法が明らかになりました。設定に関しては当然ながらオリジナルです。だって、属性が4つでは少ないと思いませんか。

第7話 ガンダールヴの決闘〜貴族と卑怯者〜

今日は才人とギーシュの決闘があるので唯人はイザベラを連れてトリステイン魔法学院の近くの森にまで転移魔法を使って移動していた。ティアルルにはイザベラの代わりにスキルニルを置いてきたので、執務の方に心配はない。こちらでも予めバレないように唯人が認識障害の魔法をかけてあるが、それでも念のために唯人は自分とイザベラにフェイスチェンジと同じ魔法をかけて潜入している。

今回、わざわざ仕事で忙しいイザベラまで連れ出したのは亜空間以外での魔法訓練のためであり、ガンダールヴの実力を見るついでに帰り道で適当な相手を探すつもりでいた。

「それにしても闇の魔法は便利なものだね。こんなふうにも使えるなんて」

今のイザベラは集中できれば別の物の影でも扱えるし、最近では魔力を直接闇に変える魔法を習得しようと訓練を重ねているところだ。

「イメージによる自由さが魔法の良い点でもあるけど、欠点でもあるな。理論を学ばせてしまえば理論通りにしか魔法が使えない。ハルケギニアでも同じ事が言えるぞ。その代表格が虚無の魔法だ」

「ま、その辺は六千年間で積もり積もったハルケギニアの癌みみたいなものだから仕方ない部分もあるよ」

「そうだな。東はエルフの土地があつて、北と西は海が広がっている。南は強力な幻獣たちの生活圏になつていれば外の世界に目を向ける余裕はない。後は僅かな東方との交流も国家を変えるほどの力はないし、権力者たちにも変わらない方が都合が良かった」

そんな雑談を交わしながら学院を囲む城壁に腰をかけて、唯人たちは才人たちが出てくるのを待つていた。

「ユイト、そろそろ教えてくれないんじやないかい。もう一人のガンダールウがいる意味を」

「ダメダメ、イザベラはヒントをすでに知っているから。そこから自分で考えて答えを出せよ」

唯人が見ている限りでは虚無の使い魔で担い手に一番必要なのは『神の盾』や『神の左手』と呼ばれるガンダールウに違いない。虚無の担い手を守る最後の砦になる存在であり、魔剣で主を守り続ける守護者。

しかも、ガンダールウは心を震わせることで強くなる物語の主人公にふさわしい力を持つ使い魔。

「異世界より運命によって導かれたガンダールウ、貴族が支配する世界の常識に立ち向かえるのか」

「急にどうしたんだい？」

「いや、何でもない」

イザベラが唯人を不審者を見る目で見ているが、彼は気にしないことにする。

唯人はルイズに命令される二人を見ながら、先ほど頭に浮かんだ言葉を再び思い返していた。才人たちに与えられた力は運命を切り開いていくためのものだ。自分の力とは違う。

自分の実力は圧倒的であることを唯人は自覚している。それこそ簡単に一国どころか世界を滅ぼすこともできるほどの魔力量と実力を彼は持っている。そのために世界を自由に操ることもできてしまう。だからこそ唯人は傍観者としてしか存在できない。物語に介入してしまえば、それだけで問題全てを解決してしまう能力を持っているせいだ。

それでも、唯人は舞台上に登場することを望んだのだ。

「それはある意味悲劇だね。誰もが舞台上に立つために力を求めているのとは反対で、ユイトたちは強すぎるせいで舞台上上がることが許されない。違うね、上がったっても相手となる人間がない。壁の花だね」

この言葉はイザベラが前に唯人の境遇を聞いた時に言ったセリフだ。イザベラには想像することぐらいしかできない領域に唯人は立っている。

「これはイザベラが気にすることじゃない。これが俺が望んだ道でもあるんだ。それに、圧倒的な力を得たからこそ俺はお前にも出会えたし、才人たちが進む道を見ることができてる。俺はそれで十分だ」

「そ、そうかい。ならいい」

イザベラは唯人の率直な言葉に顔が熱くなる。

(何でコイツはそんなことを平気で口にするんだよ)

イザベラは直接では言っていないものが、唯人にはかなり感謝している。唯人と出会えたからこそ強くなる決意ができた。自分が無能でなかったことが分かった。そんな彼女にとつての不満は唯人にとつてイザベラは多くいる守るべき人間に過ぎないことだろう。本音を言うなら、もうちょっと自分のことを気にして欲しい、と願っている。

しかし、イザベラの心境を唯人が分かるはずもなく、始まるうとしている決闘の方に意識を傾けていた。

「諸君！ 決闘だ！」

「ギーシュが決闘するぞ！ 相手はルイズの平民だ！」

ギーシュは大げさな動きで群衆に声をかけると、近くにいた生徒も大声を張り上げる。ヴェストリの広場には既に噂を聞いて他の生徒たちも集まっていた。

長期休暇を除けば、虚無の日以外には外出できない彼らにとつて娯楽は不足している。そんな中で平民が貴族と決闘するとなれば飛びつかないはずもなかったのだ。魔法が使えない平民に勝ち目があるわけない。みんなが貴族に逆らった平民が無様に倒されることを楽しみにしている。

そんな事情を欠片も知らない才人はケンカと同じ程度にしか考えておらず、どう見てもケンカをしたことのないような男に負けるとは考えてもいない。

二人が広場の中央で向かい合うと周りも少し静かになる。

「とりあえず、逃げずに来たことは褒めてやるつもりじゃないか」

「誰が逃げるか」

ギーシュが感心したように言ってみれば、すかさず才人も噛みつく。

「まあいい。さて、では始めようか」

ギーシュが始まりの合図をあげると同時に才人は相手に向かって走り出す。先手を取って殴れば終わると考え、まずは一発顔を殴るつもりで距離を詰めた。しかし、まだ才人は知っているつもりでしかなかったのだ。貴族がどうして偉そうなのか。どれだけ魔法を使える人間と使えない人間に差があるのかを。

あと二、三步程の距離にまで来た時点で、ギーシュは薔薇の造花を振って才人の前に一体の銅像を作り出す。そして、できあがった銅像は才人に向かって思いつきり拳を叩きつけた。

突然の出来事に才人は反応できず、吹き飛ばされてしまう。

「何だ、それ」

「僕はメイジだよ。ならば魔法を使って戦うのが当たり前だ。文句でもあるかね？」

「別にない。ちょっとばかり忘れてただけだ」

決闘中なので強がってみせるが、すでに才人は大きなダメージを受けていた。

（畜生、高風が言ったとおりだ。メイジは平民に対して圧倒的な力を持っている。だから、平民は貴族には逆らえない。……でも、アシを見過ごしていいわけない。俺は俺が正しいと思ったから動いた。そのことは後悔していない。あとは負けないだけだ。何としてでも勝つ方法を探せ）

「そついえば、まだ名乗っていなかったな。ぼくは『青銅』。青銅のギーシュだ。したがって青銅の人形ゴーレム、『戦乙女』がきみの相手をしよう」

ギーシュの名乗りも才人はほとんど聞いていなかった。どうやって青銅のゴーレムから逃れて、ギーシュに殴りかかるか考え続ける。さきほど当たった感覚でまともに戦えないのは才人も分かっていた。しかし、現実は無情だ。才人が考えている間にもギーシュの指示で動く戦乙女が才人に殴りかかってくる。戦乙女の拳が才人の腹にめり込む。

「がっ」

才人は避けることも出来ずに、まともにくらって地面に倒れ込む。立ち上がるうとしても才人はうまく身体を動かせない。それも当たり前だ。ギーシュが作った戦乙女は間違いなく戦闘用なので、中身は空洞でも青銅ならば十分な重さはある。そんな鈍器で二回も腹を殴られれば、昨日まで平和な国でただの学生だった才人が立ち上がれるはずもなかった。

「なんだよ。もう終わりかい？」

ギーシュが、呆れた声でぼやいた時、野次馬をかきわけてルイズと春奈が飛び出してくる。

「ギーシュ！」

「おやルイズ。悪いね、きみの使い魔を少しお借りしているよ！」

「いい加減にして！ だいたい、決闘は禁止されてるじゃないの！」

怒鳴るルイズを、ギーシュは涼しい顔で受け流す。

「禁止されているのは、貴族同士の決闘のみだよ。平民と貴族の決闘なんて、誰も禁止していない」

「そ、それは、今までそんなことなかったから……」

ルイズが言葉に詰まる。

「ルイズ？ ……まさかとは思うが、きみはそこの平民が好きなのかい？」

ルイズは、怒りによって瞬時に沸騰する。ゼロと呼ばれても事実なので否定できないが、その邪推は許せない。

「誰がよ！ 冗談はやめてよね！ 自分の使い魔が無駄に傷つけられるのを、黙ってみてられると思うの！？」

「私からもお願いします。もう止めてください」

ルイズに代わって春奈が頭を下げれば、ギーシュは薔薇の造花である杖を少しばかり下げる。

ギーシュとしてもこれ以上傷つけることは相手が平民だとしても

やりすぎだと思っっているし、ルイズのもう1人の使い魔であり、平民である春奈の謝罪ならばちょうどいい落としどころだと考えられた。

しかし、これで黙ってられないのは才人だ。いくら傷ついたとしても、ルイズには馬鹿にされ、春奈に代わりに頭を下げてもらって引き下がるのは男としてできなかつた。

「誰が怪我するっ て？ 邪魔すんなよ、バカ」

「サイト！？」

肩に手を置かれたルイズが、悲鳴のような声で叫んだ。

「へっ、ようやく名前で呼びやがったなコノヤロウ」

そうして、才人も肩に手を置いて初めて分かる。

ルイズは震えていた。春奈の方を見れば、彼女も身体が震えている。

「待ちなさい。平民はメイジには勝てないの。ハルナだって言っているじゃない。私も頭を下げてあげるから」

「平賀くん？」

「ちょっと油断しただけだから気にするな。二人は危ないから下がっている」

「おやおや……、立ち上がるとは思わなかつたな。手加減が過ぎたかな？」

ギーシュがそんな才人を挑発してくる。

(そんな訳あるか。もう身体中が悲鳴をあげてやがる。少し動かすだけでも限界だっつうの)

ルイズを春奈の方に押しやって、しっかりと立つ。

才人はゆっくりとギーシュに向かって歩き始めようとした。歩くたびに激痛が走るが、表情には少しも出さず、闘志の方もまだ衰えていない。むしろ闘志の方は先ほどよりも上がっていた。女子二人の前でこれ以上無様な姿を見せるのは才人にとって我慢できることではない。

「止めなさい、才人。メイジに負けることは恥ではないのよ！」

「うるさい。俺の恥とかはどうでもいい。俺がムカツクのは平民だから貴族に頭を下げるのは当たり前だっていう考え方だ。別にルイズに頭を下げるのは構わない。俺たちはお前の世話になっているんだ。しょうがないさ。でもな、コイツは自分がした失敗を下の人間になすりつけやがった。それが貴族の偉さなら糞食らえだ」

「平賀くん」

「高風、俺は止まれねえ。悪いがルイズを止めておいてくれ」

「サイト！」

「私たちはこっちの常識を知ったばかりだし、きつと平賀くんにも譲れない部分があるのよ」

ルイズが再び才人を止めようとするが、後ろから春奈が彼女を止

める。彼女は才人のことを信じることにした
ギーシュは向かってくる才人を見て肩をすくめる。

「やるだけ無駄だと思っがね」

「無駄？ そりやどつちがだ？」

「無論、きみに決まっているだろう？」

「その割りには全然効いてねえぞ、お前の銅像の拳。俺はまだ元気だ。メイジもけっこう弱えな」

その瞬間、ギーシュの表情は消え、再び杖を動かした。杖の動きに合わさって戦乙女は再び才人に向かって突っ込んできた。

そして、青銅の拳が今度は才人の頭に打ち付ける。才人は受け身を取ることもできずに再び地面に突っ伏した。強く打ったせいで頭からは血が流れて才人の視界を血で覆う。

(これがメイジの力か。確かにすごいわ。こんな物は地球にない。でも、俺にも譲れないもんがある)

何度倒されても決して倒れなければ負けではない。それが才人の出した答えでもある。意地でも倒れるつもりはない。貴族に逆らうことが無意味でも、何もしないでただ耐えることが正しいわけではないことを証明すること。何としてでもメイジに一発でもギャフンと言わせるつもりだった。

しかし、ギーシュの戦乙女は一切の手加減をしていない。

すでに才人の右腕は折れ、左目はさっきので腫れて、うまく見えなくなっている。右目も血で上手く見えないし、呼吸をするだけでも辛いので肋骨などの骨もどこか折れているかもしれない。

何度、意識が途切れそうになっても何とか立ち上がる。

だが、それも限界に近い。何度目か分からない衝撃のあと、才人はもう立ち上がることができなくなっていた。

「もう止めてよ。これ以上は死んじゃうわ」

ルイズは春奈の制止を振り切って、才人の方に近づく。

「もう大丈夫だから。これだけ頑張ったら、誰も馬鹿にはしないわよ」

途切れそうになる意識の中で、才人はルイズの涙を見る。才人は春奈の話を思い出した。

誰よりも努力している彼女が魔法を使えなくて馬鹿にされていることを。

そして、食堂でも自分だけでなく、主のことまで馬鹿にしていたギーシュのことを。

「あんたもわたしの使い魔なんだから。これ以上、勝手な真似は許さないからわよ」

「もう終わりかい？」

才人は気力だけで再び立ち上がる。才人は許せなかった。こうやって自分の主を泣かせてしまい、一緒に召喚された春奈に心配をかけている自分が許せなかった。

「ちょっと待てよ。昼飯が終わったばかりで運動したからな。休憩してるだけだ」

ギーシュとて貴族、ここまで誇りを見せられたら黙っているわけにはいかない。

軽く薔薇を一振りする。

舞い落ちた花びらが一本の剣に変わり、地面に落ちた。ギーシュはそれを掴むと、才人に向かって投げた。その剣は才人の真横に突き刺さる。

「君。これ以上続けるといふのなら、その剣を取りたまえ。剣とは平民が貴族に食らいつくための武器だよ。君にあげようじゃないかでも、もしここでやめるといふのなら、一言こつ言いたまえ。ごめんなさい、とね。それで手打ちにしてやるわ」

「そんな便利な物はさつさと出せ」

「駄目よ。それを取ったらギーシュは本気になる。死ぬわよ」

しかし、ルイズが止めるのを聞かないで才人は何のためらいもなく剣を左手で取った。

「構わない。さつきも言っただろう。俺は下げたくもない頭は絶対に下げねえ！」

才人は剣を抜いた途端に違和感を感じる。先ほどまで苦痛に感じていた怪我の痛みが軽くなっていた。そして、身体の方も最初よりも軽く動けそうな気がする。才人は気付いていない。ルイズの目は強く輝いている左手のルーンに目が奪われていた。

才人は今の内にと剣を振るった。それだけで戦乙女は真つ二つフルキューレになる。

周りは才人が容易くゴーレムを斬ったことに驚くが、一番驚いているのは才人であった。

（何で力は全身に漲みなぎってくるんだ。おまけに、体が風のように軽い。後は左手の握る剣だ。まるで手と一体化したかのようによく馴染んでいる。今まで握ったことはなかったけど、剣って、こんなに簡単に振り回せるもんじゃないはずだ）

そんなことを考えながらも決闘の途中だと意識を切り替え、剣を持ってギーシュの方に振り向く。

「まずは、誉めてあげよう。ここまで貴族メイジに楯突く平民がいることに。素直に感激したよ。しかも、例え一体でも僕の戦乙女フルキユールを切り裂けたことにもね」

ギーシュは再び薔薇を振って、6体のゴーレムを作り出す。今度の戦乙女フルキユールにはそれぞれが武器を所持していた。先ほどとは違うギーシュの本気だ。

才人を確実に仕留めるためにギーシュはゴーレムの出し惜しみをしない。先ほどの剣技は目で追えなかったのだ。つまり、自分が思っている以上に才人のことを強いと認識を変える。ただの平民と一括りにしていい相手ではない。

しかし、才人の方は逆に余裕があった。怪我の痛みを軽減で周りを見る余裕ができていた。そして、ギーシュが操る戦乙女フルキユールの動きが思った以上に遅く感じていた。この程度の動きならば今の才人でも勝つことができる。

才人は思いつきり前に向かって跳ぶ。

そこからは一瞬だった。

6体いたはずの戦乙女フルキユールは瞬く間に斬り伏せられていく。

全てがバターののように斬り裂かれる。才人が剣を振るたびに戦乙女キユールのどこかが吹き飛び、地面に沈んでいく。ギーシュの全力は時間稼ぎにもならなかった。

ギーシュは剣から逃れようとしたが、うまく足が動かさずに尻餅をついた。

才人はギーシュの顔面ぎりぎりまで剣を止めてみせた。

「続けるか？」

才人の声にギーシュは両手を挙げて、杖を地面に落とす。

「僕の負けだよ。この勝負、ルイズの使い魔である君の勝ちだ」

ギーシュはおとなしく敗北を認める。彼は途中で気付いていた。彼の言葉に自分がやっていることの愚かさを見せつけられたのだ。自分は名誉を守ろうとして更なる名誉を失おうとしていた。後で二人に謝りに行こうと心の中で決意する。

才人はギーシュの敗北宣言と同時に気を失っていた。

「サイト」「平賀くん」

「ギーシュに平民が勝った」

気を失った才人を見て、ルイズと春奈は才人に駆け寄る。

そんな二人を見てギーシュはせめて保健室に運んでやろうと杖を手を取ったときに気付いた。才人に向かって杖を構えている貴族がいる。ギーシュはなんとか止めようとするも足をふらつかせる。才人との戦いで思ったよりも精神力を消費したせいだ。

ぎりぎりルイズが気付いたが、才人を守ったせいで代わりに彼女はエア・ハンマーで吹き飛ばされた。

「ヴェリエ、君は誇りがいいのか！ 決闘の勝者に向かって何をしている」

ギーシュは膝をつきながらも止めようとする。決闘を始めたときはお遊びに近かったかもしれないが、あれは紛れもない決闘だった。それならば、勝者は賞賛を浴びなければならぬはずである。それを同じ貴族に汚されたことが何よりも気に入らなかつた。

「そんなものは平民相手に気にする必要ないだろう」

ヴィリエの吐き捨てるような言葉にギーシュは更に怒りを燃やす。確かに平民の地位は低い。それでも、時にはそんなことよりも重要なことがあることをギーシュは知っている。

そんな二人の間で、思わずルイズの杖を捨てた春奈の左手のルーンが輝いていることは誰も気付かない。

「ラナ・デル・ウインデ」

「平民が詠唱しても無意味」

春奈の詠唱に気付いた頃にはもう遅い。

「ぐはっ」

ヴィリエはエア・ハンマーで吹き飛ばされる。

その光景に才人がギーシュを倒した以上に場は混乱する。

「おい、あいつは平民じゃなかつたのか」

「いや、その前にゼロの杖で魔法を使ったぞ。どういつ訳だ」

「まさか、ゼロが呼んだ使い魔がメイジだったとは。でも、僕に逆

らった報いを」

「止めておきなさい、ヴィリエ。それ以上は私たちが相手をするわ」

ヴィリエが立ち上がったところで、いつの間にか出てきたキュルケとタバサの二人が杖をヴィリエに向けていた。

「何をする」

「あら、あなた相手に礼儀が必要かしら。平民相手でも素直に負けを認めたギーシュじゃないのよ」

「あなたはただの卑怯者」

初めは娯楽として見ていたがキュルケであるが、最後の才人の活躍で悪い癖が出ていた。

タバサも平民のはずだった少女が魔法を使えるようになったことに興味を示していた。

二人相手にヴィリエが勝てるはずもなく、タバサとキュルケ、二人のトライアングルクラスを敵に回す勇気がない他の貴族は心境はヴィリエと同じでも傍観するだけで助けに入る人間はいない。

結局、教師が止めに来るまで睨み合いは続いていた。

「どづいつことだい？」

イザベラも学院生と同じように混乱していたが、唯人の方は静か

だ。

「答え合わせだな。ガンダールヴの意味は」

「『神の盾』と『神の左手』だろ」

「残念ながらそれでは百点じゃない。本当はもう一つ、『魔法を操る小さな小人』だ」

その言葉にイザベラは目を丸くした。

「じゃあ、まさか」

「そうだよ。高風春奈はもう一つの意味でのガンダールヴなんだ」

第8話 新たなフラグ！？～VSオーク鬼～（前書き）

やっぱり、あのままでは都合が悪いので話を少し変えてみました。

第8話 新たなフラグ！？～VSオーク鬼～

side オスマン

オスマンとコルベールは、『遠見の鏡』で決闘の一部始終を見届けると、再び顔を見合わせた。

「オ、オールド・オスマン」

「う、うむ」

オスマンとコルベールの声が、奮えている。ガンダールヴのすごさを少女の魔法はそれだけ両者に衝撃を与えていた。

「あの平民、勝ってしまいましたが、それにあちらの少女も」

「うむ」

オスマン老もまた、まだ意識が鏡の向こうにいったままなのか、返事がなんとなく虚ろだ。

「グラモンはドットメイジですが、それでもただの平民に遅れをとると思えません。そしてあの動き。あの速さ！ あんな平民、見たことがない！ やはり、彼は『ガンダールヴ』ですぞ！ そして、平民の少女は魔法を使えるようになるとは」

「うむむ」

「オールド・オスマン！ さっそく王室に報告して、指示を仰がねば」

「いや、それには及ばん」

オスマン老は、重々しく頷く。

「なぜですか？ これは世紀の大発見ですよ！ 現代に蘇りし、始祖の使い魔ガンダールヴ！」

「落ち着きたまえ、ミスタ・コルベール。『ガンダールヴ』はただの使い魔ではないのじゃぞ」

「その通りです、オールド・オスマン。始祖ブリミルの用いた『ガンダールヴ』は姿形の記述は一切ありませんが、主人の無防備な詠唱時間を守りぬくために特化した存在だと、文献には残されています」

「そうじゃ。始祖ブリミルは、呪文詠唱の時間が非常に長かった。その魔法のあまりの強大さゆえに。知つてのとおり、魔法使いメイジが魔法使いメイジとして強さを磨く限り、その詠唱は強い意思の集中を必要とする。魔法それ自体が強力であればなおさらの。当然、そんな強力な魔法を扱っておる時には敵の動きを見る余裕なんぞ持てはせん。そんな無力な間、己の身を守るために始祖ブリミルが用いた使い魔が『ガンダールヴ』なのじゃ。その強さは」

「千人もの軍隊を一人で壊滅させるほどの力を持ち、あまつさえ並の魔法使いメイジであればまったくの無力に追いやられたとか！」

非常に興奮した調子のコルベールが、オスマン老の言葉を継ぐ。

「じゃから、落ち着かんかいミスタ！」

「も、申し訳ございません！」

背筋を伸ばし、冷静な表情に戻るコルベールだが、様子は落ち着きからは程遠い。

「で、じゃ。ミスタ・コルベール」

「は、はい」

「その少年たちは、本当にただの平民だったのかね？」

「はい。どこからどう見ても、ただの平民の少年と少女でした。ミス・ヴァリエールが呼び出した際に、念のため『ディテクトマジック』で確かめたのですが、真正正銘、ただの平民の少年と少女でした」

「そんなただの少年は、なぜ現代の『ガンダールヴ』になってしまったのかね？　そして、ただの平民の少女が魔法を使えるようになったのかね？」

「それは、ミス・ヴァリエールと契約したからですが」

「彼女は優秀なメイジなのかね？」

「いえ。といいますか、むしろ無能といいますか。どんな呪文を使っても、必ずといっていいほど爆発してしまうのです」

「そんな無能なメイジが呼び出した二人のガンダールヴは片方は一騎当千の剣士になり、もう一人もメイジとなったのかね」

「それは」

コルベールにもオスマンが危惧している事態に気づいた。

「そういうことじゃよ。王室のぼんくらどもにこれほど興味をそえられそうな二人組を渡すわけにはいくまいよ。そんなオモチャを与えてしまつては、また戦を引き起こしてしまつじやるうて。宮廷で暇をもてあましている連中は、つくづく戦好きじゃからな」

「はつ。学院長の深謀には、相変わらず恐れ入ります」

「ともあれ、この件は儂わたしが預かるぞ。ミス・タカナギはメイジとして学院に出迎えよう。彼女とミス・ヴァリエールを呼び出して説明をしておいてくれ。そして、このことは他言は無用じゃ、よいな」

「は、はい！ かしこまりました」

オスマン老は杖を握ると、苦笑したまま窓際へ向かった。

見下ろす眼下、西の中庭ヴェストリに未だ騒いでいる生徒の群れを見下ろしながら、遠い歴史の彼方へと思いを馳せる。

「それにしても伝説の使い魔、『ガンダールヴ』か。いったい、どのような姿をしとつたのじやるうなあ」

「この古書によれば『ガンダールヴ』はあらゆる『武器』を使いこなし、敵と対峙したとありますから」

「ふむ」

「とりあえず、腕と手はあったんでしようなあ」

side ユイト

オスマンたちが春菜のことをメイジとして学院に迎えることを決定したところまで見届けると、唯人は頭の中で状況を整理しなおしていた。いくら予想していたとしてもあくまで予想でしかない。ここから生まれる誤差をどのように対処するのか考えなければならなかった。

「それにしても魔法が使えるようになるか」

少しばかり悔しそうな声でイザベラは下を見ている。やはり彼女には普通の魔法が使えないことにわずかな未練があった。それを異世界の少女が簡単に使っているのを見て劣等感を覚えてしまう。

「推測でよかつたら考えはまとまっているけど、聞くか」

「お願いするよ」

「初めに二人が召喚されたときにも言ったと思う。この世界には多くの分岐点が存在している。そして、俺が見せた脚本はその分岐点の中で最も大きい道でしかない。つまりだ、場合によって脚本とは違う未来が生まれることも多々ある。この場合だと、俺や春菜が本来とは違う分岐点になった。俺という存在でイザベラは脚本と違う

道筋を歩み始めたし、春菜の存在は反発しやすい才人とルイズの潤滑油になっていただろう」

「そうだったね」

「ちょっと話は逸れたけど、元々ガンダールヴには『魔法を操る小さな小人』という意味もある。だからこそ、道が変わればルーンの効果も変わることがあるんだ」

「なるほど、分岐点か。思いついただけでも頭がパンクしそうだよ」

「そりゃ、そうだ。イザベラが考えるだけでもたくさんの分岐点が見つかるかもしれないぞ。それこそ、虚無の担い手がイザベラだったとか、呼び出されるのは才人ではないとか。だから、分岐点のことをあまり考えても意味はない。人間はあるものを利用して生きていくしかないんだよ」

「分かったよ。とりあえずは私の訓練かい？」

「おう。ちゃんと準備してあるからな」

「ほどほどにしてくれよ」

次の瞬間には近くの森に転移した二人は適当に森の中を歩いていく。

「さて、訓練はどこでするんだい」

「ちょっと待て。今、起動させるから」

訓練用に作っておいた魔法式を起動しようとした段階で唯人は手を止める。

唯人の肌が近くで魔力反応を察知していた。この近くで誰かが魔法を使っていることになる。誰か分からないが、様子だけ見ようと唯人は詳しい気配を探るために魔法を使う。

そして、探索魔法に引つかかった相手は巨大な生物に襲われていることが分かると、唯人は助けに入るために駆け出す。

「イザベラ、ついて来い」

「わかった」

急に走り出した唯人についていくイザベラも何やら緊急事態が起こったことに気づいた。

イザベラたちの目の前では一人の少女が魔法を使ってオーク鬼と戦っている。しかし、あまり戦闘が得意ではないらしく、その動きは拙いし、攻撃もほとんどダメージを与えることができていない。

「イザベラ、テストの代わりだ。一人で倒してみろ」

「まったく、無茶を言う師匠だね」

そう言っつて、イザベラはオーク鬼に一人で立ち向かっていく。本来、オーク鬼は手だれの戦士5人に匹敵する戦闘力を持ち、一ヶ月しか戦闘訓練していない相手が戦うべき敵ではない。

それでも、イザベラがオーク鬼と戦うのは唯人が戦えると判断したからこそだ。唯人の期待を裏切らないためにも、イザベラは負けるつもりはない。

その間に唯人は怪我をしているらしい少女の手当てをする。幸いにもたいした傷はないので、簡単な治癒魔法で治すことができる。

淡い光とともに傷が治ると、少女は驚いた表情でこちらを見た。

その顔を見て、唯人も相手が誰か分かった。ギーシュが二股をしていた片割れの少女、ケティ・ド・ラ・ロッタだった。おそらく振られた悲しみから森のほうに行つたのだらうと推測をしながら、イザベラのほうに目を向ける。

唯人による魔法の変装が消え、ガリア王家の特徴である蒼い髪が見えてしまっていた。

「あなたたちはいったい？」

「ごめんな」

「えっ」

唯人はそう言うと、眠りの魔法をケティにかけ、強制的に眠らせ、簡単な記憶操作を施す。

ケティを寝かしつけた後、周りに探索魔法をかけた。そこには何体かのオーク鬼が集まり始めていた。イザベラには目の前のオーク鬼に集中してもらふことにして後は唯人が片付けるつもりだ。

イザベラはうまく立ち回りながらオーク鬼と距離をとる。

「『我が影に集いし精霊よ。影より出でて、敵を穿て。シャドウ・ランス』」

影から飛び出た槍がオーク鬼に突き刺さるが、左の腕が動かなくなつたぐらいで、オーク鬼の戦意は衰えていない。

「ち、しつこいね。『樹の影に集いし精霊よ。影より出でて、敵を切り裂け。シャドウ・エッジ』」

続いてイザベラが放った4方向から影の刃はオーク鬼を切り刻んだ。さすがに全方位からの攻撃を避けることもできず、オーク鬼は長い尾を引く断末魔を残しながら、地響きを立てて前のめりに地面に倒れた。

イザベラの精霊への干渉と制御能力は十分に合格をあげることのできる出来だった。唯人が見た感じでも一流の制御能力を身につけている。少し動きに拙さ見られるが、それはまだ訓練途中だと諦めるしかない。

ハルケギニアではありえない衝撃的な光景にケティが起きていれば面倒だったと思いなながらも、唯人の意識は近づいてきたオーク鬼に向けられている。

「イザベラ、後は俺に任せておけ」

「分かったよ」

オーク鬼が十体ほど唯人たちを囲むが、この程度の相手では唯人にとって全力を出す価値もない。それこそ、オーク鬼と唯人では蟻と像の戦いどころではない。唯人とはもつと差があった。

「ま、この程度か。一瞬で終わらしてやるよ」

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウインデ」

唯人はハルケギニアのルーンを唱え始める。オーク鬼も不運だった。唯人は魔法にかけては天才どころでは語れない実力者だ。その異質さは学習能力。イザベラが訓練している間に、彼は一度だけイザベラから見せてもらって把握していたハルケギニアの魔法を完全に習得していた。

それに一番驚いたのはイザベラだ。闇の精霊と仲良くなってから

他の精霊の動きも大雑把に分かるようになっていた。だから、理解できる。唯人は強大な魔力を利用して精霊を操っている。その精密さ自分ではまだできないレベルだ。

「ウインディ・アイシクル」

大量の氷の矢はオーク鬼に突き刺さり、あっという間に絶命させていた。

「ほら終わった。もう大丈夫だぞ」

唯人がイザベラに声をかけると、あきれた様子で唯人に近づく。

「あなたって、本当に常識外れだね」

「話は後だな。先にこの娘を寮に送るぞ」

「そうね、さっさとティアルルに帰るわよ」

翌日、寮の自室で目覚めたケティはいつの間にか寮に帰ってきたのが分からず、首をかしげていた。

第9話 不穏な影（前書き）

かなり遅れましたが、投稿できました。まだ楽しみにしてくれている人がいるなら嬉しいです。作者の8割は思いつきと厨二病でできていますので、注意してください。

第9話 不穏な影

side才人たち

あの決闘の後、春奈は魔法を使ったとかで、メイジとして学院に通うことになった。ただ本人は何故こうなっているのか分かっていないらしい。

現状で才人たちが分かっていることは

「このルーンが原因なことぐらいだよな」

才人があの動きができたのはルーンを得てからである。それは魔法を使った春奈も一緒だ。原因はルイズに刻まれたルーンぐらいしか考えられなかった。

今のところ、高凧はハルケギニア語で書かれたらしい教科書に四苦八苦しているらしいので、余計なことを言うわけにはいかない。

「分からないことばっかだな」

マルトーたちに我らの剣と呼ばれて調子に乗っていたところを春奈によって注意されてから、才人は空いている時間に自分に何ができるか考えていた。

魔法の授業は全く理解できず、ルイズたちの授業中はこうして中庭でぼんやりしていた。

「高凧が言っていたみたいに俺も剣の練習でもした方がいいかな」

春奈は元の世界に戻る方法を探すために魔法の勉強をしている。

才人は自分にできることは剣の修行くらいしか思いつかなかった。

「ルーンのせいで、急に強くなったんだよな。ああ、俺はどうしたらいいんだよ」

ある意味自分一人ならルーンの手で調子に乗っていた才人であるが、春奈のおかげで自分のことを考えるようになったのだが、自分にできることはそれくらいしか思いつかなかった。

「よし、とりあえずコルベール先生に相談するか」

今の時間は離れて何かしているはずだ。そう思い立つと、すぐに行動を開始した。

「コルベール先生、相談したいことがあるんですが」

「おや、君はサイト君だったか。それで、相談とは？」

平民として扱われる才人に対してもこうして向かい合ってくれるコルベールは才人にとって話しかけやすい人間の一人だ。

「ええと、剣を修行しようと思うんですけど、何か良い方法はありませんか？」

「そうですね。学院にも衛兵がいるので、彼らに教わるのはどうですか？ 私からも話をしましょう」

コルベールにとって才人からの提案は渡りに船だった。これで、伝説の使い魔であるガンダールウ、を直接観察することもできる。

「ありがとうございます」

「いえいえ、ミス・ウ、アリエールのことを頼みますよ」

「ねえ、タバサ。ここの部分なんだけど」

「そこは」

「なるほど、ここは？」

「そこは」

「ふむふむ」

「これも違うわね」

才人が剣の修行について相談している頃、春奈はタバサに魔法を教わっているところだった。

そして、ルイズは図書館中の本を読んでいた。

ことの始まりは授業の後で上手く魔法が使えない春奈がタバサにある質問をしたからだ。

「私の失敗とルイズの失敗ってどう違うの？」

「ルイズのは爆発で、貴方のはただの失敗でしょ」

そう答えたのキュルケであり、それがルイズの魔法に対する学院

の認識でもあった。

「そうじゃなくて、どういうプロセスでルイズの魔法は爆発になるって意味なんだけど」

「どういうこと？」

ルイズは首を傾げる。ルイズにとって使い魔が魔法を使えて自分が使えないのは腹が立つが、自分のことを話題にされたら参加するしかない。

「魔法の失敗って、普通は何も出ないんですよ。それなのにルイズだけは爆発する。何でルイズだけ爆発なの？魔法って自由さはあるけど、決まったルーンとか法則だってあるでしょ。火のルーンが全くないのに爆発したり、水のルーンで爆発っておかしくない」

現代の学生である春奈は水蒸気爆発など、色々な知識はあるが、ハルケギニアの認識は違う。水は治癒や水そのものをイメージしているので、爆発なんてするはずがないと春奈は考えていた。

「それは」

ルイズには何も答えられない。失敗しかしていないルイズには自分の魔法を見つめ直す余裕はなかったため、何故失敗するのか詳しく調べていなかった。

「先生は何か言っているの？」

「何も。ただの失敗と認識している」

タバサの答えに春奈はあきれろしかなかつた。

「それ、先生の意味ないよ。生徒だけで分からないなら先生が何とかするものだよ。普通と違ふ時は何か理由があるはずだから、先生なら調べないと」

「その辺は期待しないほうがいいわよ。どうせ自分の自慢か、役に立たない理論しか教えないから。大抵、魔法を本気で勉強する人は実家で家庭教師を付けているもの」

「なら、ルイズ。良かったら一緒に図書館で勉強しない。私も魔法を勉強するし、ルイズも失敗の理由を探せるかもしれないよ」

「なら、私も協力する。図書館ならフライも必要になる」

そうして、タバサによる春奈の勉強会とルイズの調べ物が始まつた。

さすがにキュルケはそこまでルイズに付き合つ気はないらしく、図書館には来ていない。

「今日はこんなところ」

「やっぱりーからだ大変ね」

「でも、理解は早い。すぐ皆に追い付ける」

「先生がいいからね。ルイズは何かわかつた」

「いいえ。司書の人にも聞いてみたんだけど、そういった記録らしい本はないらしいし、使い魔を調べてみても私と同じ例はないわ」

使い魔を調べたのは春奈の提案であった。ルイズと同じように人間を召喚したメイジもいたかもしれない。もし、いたならばルイズと同じように魔法を失敗していたのではないかと期待をしていたのだが、

「そもそも人間を召喚したという例が全くなかったわ」

長い歴史を誇るトリステイン魔法学院に資料がないとなると、後はアカデミーなどの限られた場所しかない。

「そうなんだ。良い案だと思ったんだけどな」

「明日、どうする？」

「明日も今日と一緒にいいんじゃないの？」

タバサは首を横に振ると、簡潔に答えた。

「明日は虚無の曜日」

「虚無の曜日？」

しかし、こちらに来て日の浅い春奈はまだ完全にこちらの曜日を覚えていない。

「虚無の曜日は授業が休みなの。一応アンタたちの服とサイトの武器でも買いに行く予定なんだけど」

「あつ、確かに服は必要ね。それなら明日の勉強会は無しか。ごめ

んね、タバサ」

春奈が持っている服は召喚された時の服と制服しかない。才人は召喚された時の服だけだ。

「別にいい」

「じゃあ、部屋に戻るわよ」

「またね、タバサ」

side 唯人

トリステイン魔法学院の光景を鏡から覗いていた唯人は一息つくために、ソファに寝転がった。

高凧春奈という存在は唯人が思っている以上にルイズに良い影響を与えているらしい。ルイズが改めて自分の魔法に真剣に向き合い始めていた。

「これもまた分岐点か」

「分岐点か、じゃないわよ。人口が増えて仕事が増えているんだからアンタも働きなさい」

現在、唯人がいるのはイザベラの執務室である。書類の山に埋もれているイザベラの隣で唯人は堂々と寝ていた。

唯人とイザベラのおかげで治安が向上しているティアラルは徐々

に人口が増えており、元からの住民と移民の調整にイザベラたちは苦心していた。

「大丈夫だって、お前たちがぶっ倒れる前に俺が回復魔法をかけてやるから」

「私たちがぶっ倒れなくて済むようにアンタに働けって言うているのでしょうか」

「さて、俺は領地の見回りにでも行ってくるわ」

「逃げるな」

イザベラの絶叫は噂もあって始めは皆から怯えられていたが、人間とは慣れるものだ。いくら唯人がサボっていても周りの人間に決して当たらないので、今ではまたユイト様がサボっているんだな、という認識になっている。

しかし、唯人はサボっているように見えて、しっかり周りを見ており、影で色々イザベラや職員のために働いているので、不満を持っている人間はからかわれているイザベラぐらいである。

「さてさて、こうなった原因は何なんだろうな」

唯人として、ただサボっていただけではない。春奈などのイレギュラーが起きた原因が自分以外にあるのか商人たちや移民たちから情報収集をしていた。

『全知の書』を使えば、簡単に知ることはできるが、世界から直接知ることは世界に与える影響が大きい。本筋を知るだけでも強い影響が出る可能性があるのだ。IFの可能性まで知ってしまうえば唯人には手に負えない危険もあった。

「まあ、原因はどうだっていい。邪魔なら消す。それだけだしな」

空から街を見下ろす。廃虚まで後一步だった街は唯人とイザベラによって復活していた。元々、ティアラルは交通の便が悪かった訳ではなかった。ただシャルル派肅正の時に街に火事が起き、そのまま放っておかれたからだ。

「やっぱり読めないな。ジョゼフの考えは」

どれほど唯人がすごい魔法使いであつても、政治家としての才能はそこまでない。そんな唯人では無能を演じておきながらガリアを問題なく統治してみせるジョゼフの考えを見抜くのは心を読まない限り無理だった。

さらに、手元には唯人なりにまとめた他の国の情報がある。今、唯人が注意しているのはゲルマニアだった。唯人が思った以上に軍事関係に力を入れている。

魔法に頼らない技術を進歩させるゲルマニアは平民による革命が起きる可能性が一番高い国だ。銃の進歩次第では近い将来にも貴族の時代は終わる。

そのため、ジョゼフばかりに集中するわけにはいかない。さらに、別の虚無使いであるロマリアから注目を外すこともできない。

だが、唯人には平民の革命を止める気はない。革命が起きるのは傲慢な貴族たちに不満があるからであり、貴族が上手く統治して不満を消せれば、革命なんか起きないで済む。

「こつちも俺の大切な人間を傷つけるなら遠慮なく消すけどな」

唯人は決して善人ではない。全ての人間を幸せにしたいと思わない。彼にとって大切な人間だけを守りたいのだ。そのためには例え

弱い人間だろうと容赦しない。

それがそれなりの数多く異世界を回って唯人が得た結論だ。唯人では全ての人間を救う英雄にはなれない。それを唯人は知ってしまったている。

「しかし、ティアラルはイザベラに努力してもらうにしても、さすがにハルケギニア全体を一人でカバーするのは限界があるな」

集められた情報も大した情報はない。

「というか、比べる元のデータがないからな。どう違っているのか考えようがないな。若過ぎるのに強いメイジとか普通とは違うメイジの情報もないし、そんな存在がいなくて俺が原因なのか、存在するけど相手が狡猾なのか、どっちかだな」

現在の唯人たちはティアラルだけを統治するならまだしも、ハルケギニア全体に意識を向けるには圧倒的に人手不足だった。

side???

ゲルマニアのある地方

「なるほど、二人か。原作とは少し違うみたいだが、まあいい。この程度は誤差の範囲だろう」

トリステイン魔法学院に潜入させた部下からの報告を受け、青年は笑みを浮かべる。

「おい、下がっていいぞ」

「はっ」

青年は青年以外に誰もいなくなった途端、高笑いを始める。

「ハツハツハ、平賀才人に高凧春奈か。確か高凧春奈はゲームのキャラクターだったけど、面白い。特に平賀才人、お前ごときに英雄は重いだろ。だからな、俺が変わってやるよ。本当に世界から選ばれた人間である俺がな」

第10話 フーケと舞踏会

side 唯人

ふと日付を確認した唯人は初めの大きなイベントであったことを思い出す。

「そっぴゃ、フーケが出てくるの今日だったな」

「ああ、あの盗賊ね。手を出すつもりかい？」

イザベラは仕事をしながらも、分岐点の話だと気づくと唯人に今後の予定について尋ねる。

「うん、必要ないだろ。『破壊の杖』にこだわるなら脚本通り負けてくれると思うし、一回捕まった方がこちら側に取り込みやすい」

唯人はフーケをレコン・キスタに取り込ませるつもりはないが、才人たちの邪魔も極力しないよう予定だ。

「それは脚本から外れないためかい？」

「フーケが直接レコン・キスタでやったことって大したことやってないしな。その段階でなら、どうせ引き抜いても脚本への影響は少ないだろう。レコン・キスタにとってフーケの代わりくらいは他にもいるだろうし」

わざわざ脚本の隅々まで読んでいないため、何をやったのかまで

記憶していないが、唯人は記憶していないならどうでもいいことだと考えていた。

「確かに人が増えて家も足りなくなってきたし、ティアルルに土のトライアングルのメイジが来てくれるのは助かるね」

「最近はやく記憶操作の魔法が効いてきて、街を普通に歩けるようになったし、俺の負担も減りそうだからな」

最初の失敗から唯人は街全体に記憶操作の魔法をかけ、ティアルルでの唯人の立場はイザベラの腹心である凄腕のメイジという認識になっている。

「もつと仕事があつても平気なくせに、よく言うよ」

仕事を押し付けられているイザベラは軽く文句を言っても唯人は全く気にした様子はない。

「まあな。でも、俺がこちらの魔法を使えるからつて、全部俺がやる訳にはいかないからな。できるかぎり現地の人間がやるのが一番だよ」

ティアルルの治安が向上して人口が向上して、多少はメイジが増えたが、まだまだ人手不足である。しかも、全員がドットかラインのため、トライアングルクラスであるフーケを取り込む必要があった。

少なくとも地盤が整い、イザベラが自由に動けるぐらい人材が集まるのを唯人は待っていた。

side才人

「で、これからどうするの？」

キュルケが買ってきた剣とルイズが買った剣のどちらを才人に使わせるか、二人が喧嘩し、魔法対決するところまでは春奈もなんだかんだで仲が良いと思っていたが、その後に襲撃してきた謎の人物には誰も何の対応もできないままに逃してしまった。

そして、襲撃者の正体が『土くれ』のフーケだと分かり、誰も動かなかつた時にルイズが立候補し、それに伴い、キュルケとタバサまで参加することになった。当然ながらルイズの使い魔である二人も参加することになったのだが、才人と春奈はフーケについて全く知らない。

「フーケの魔法の特徴は錬金とゴーレム。スクエアのメイジでも逃したほど」

「それって、私たちに捕まえられるの？」

春奈はキュルケやタバサが同学年でも僅かしかいないトライアングルであることは聞いている。主人であるルイズはあだ名が『ゼロ』であることから魔法は期待できない。

「私たちの任務は『破壊の杖』を取り戻すこと。別にフーケを倒す必要はない」

「取り戻した後は？」

「シルフィードで逃げる」

「分かった。付いてきてくれてありがとうね、タバサ」

「別にいい」

打ち合わせをしていた二人以外はキュルケとルイズはいつもの喧嘩をしており、才人も二人の間でおろおろしているだけだ。

「大丈夫かな？」

「たぶん」

フーケのアジトの近くまで来てから歩き出してからも才人にちよつかいをかけるキュルケにルイズが怒ると、いつもの喧嘩に緊張している二人が馬鹿に思えてくる。

しかし、さすがの二人もフーケのアジトが見えた時点で二人も黙り、慎重になる。ここまで五人に付いてきたロングビルは一旦、別れて周りを探索している。

「じゃあ、一番速い平賀くんが偵察してきてくれる。フーケがいたら戦わないで、私たちの方まで戻ってきて」

「分かった」

才人はキュルケに渡された剣を握ると、素早くアジトに近づき、中を覗き込んだ。

「誰もいないのか？」

才人が窓から回って軽く扉を開けてみてもアジトには誰かがいる

様子はない。

確認のために軽く音を立てても全く反応はなく、才人が春奈たちに安全だと合図を出すと、ルイズ以外の全員がアジトに近づき、中に入ってくる。

「あつた」

「うっそ、あつけないわね」

タバサが中であつた箱を開き、『破壊の杖』であることを確認した。

才人と春奈がタバサの持っている『破壊の杖』を見ると、言葉を失った。

「嘘だろ。何でコレがここにあるんだよ」

「分からない。さすがにこれは先生に聞くしかないよ」

ここにあるはずがないものを見た二人だが、この場で答えがわかるはずもない。

「きゃあー」

「ルイズ」

四人が『破壊の杖』を見つけた時、ルイズの悲鳴が響き、才人が最初に飛び出していった。

出ていった四人が見たのはゴーレムがルイズを襲っている光景だ。

「当たり前さいよ」

ルイズは杖を振るが、失敗魔法は全くゴーレムに当たらない。逆にゴーレムに叩き潰されそうになったとき、才人がルイズを抱き上げて避ける。

「何するの」

「馬鹿野郎、逃げるに決まってるだろ。もう取り戻したんだ。別に戦う必要はないだろ」

「放しなさい。私は戦うわ。魔法を使えるから貴族じゃないの。こういう時に先頭に立って戦うのが貴族なのよ。盗賊に怯えて逃げるようなメイジは貴族なんかじゃないわ」

「それで、死んだら意味がないだろ」

「名誉のためよ。怖くないわ」

そう言いながらルイズが震えていることに才人は気づく。

親も抜けていると認めるほど、平賀才人は単純だ。すぐに目先のことだけで動いてしまう。だからこそ、目の前で女の子が震えているなら、それを守る。

例え、それが自分たちに理不尽な要求をした少女だとしても、今のルイズは守るべき女の子だった。

今の才人はそれだけを考える。

「なら俺を頼れ。俺はお前の使い魔だろう。使い魔は主人を守るものなんだろう。それなら、俺が守ってやる」

「サイト」

ゴーレムは才人たちを踏み潰そうとするも、才人はそのスピードを發揮してひたすら逃げ続ける。

「高風、ルイズのことを頼んだ」

ルイズを三人のところを下ろして身軽になった才人は全員が逃げる時間を稼ぐために近づいていく。しかし、最初のゴーレムの一撃を剣で受け止めた時に簡単に折れてしまった。

「なっ、これって有名な奴が造った剣じゃなかったのか。何で簡単に折れるんだよ」

才人は文句を言いながらも、すぐに折れた剣を捨て、ルイズが買った方の剣で戦い始める。

「何よ、あれ」

「店主に騙された」

「後で燃やすわ」

淡々としたタバサの口調にキュルケは怒るが、春奈と才人はハラハラしながら才人の方を見ていた。才人の方はルイズが買った方の剣でなんとか持ち堪えていた。

「でも、どうするの。平賀くんを逃がせる？」

「難しい。ゴーレムに私たちの魔法が通じない」

ルイズを担いでいた才人を援護するために、三人で魔法をぶつけたが、全く効果はなく、ゴーレムはこちらに見向きもしなかった。今、才人を逃がすためにシルフィードの高度を下げれば、ゴーレムの餌食になる。

そのため、三人はタバサが呼んだシルフィードに乗って才人の戦いを見守るしかなかった。

そんななかで、ルイズは目の前にある箱から『破壊の杖』を取り出していた。

「ちょっと、ルイズ。何やっているの」

「ちょっと使っただけよ。ちゃんと後で謝るわ」

「タバサ、お願い」

「ルイズ」

飛び降りようとしているルイズにタバサがレビュテーションをかけ、地面まで下ろす。

しかし、ルイズがいくら振っても『破壊の杖』は反応しない。

「ちょっと、これって。どうやって使うのよ」

ルイズの行動に焦ったのは春奈の方だ。『破壊の杖』は本来ならこの世界にないはずの武器だ。この世界の人間であるルイズに使えるはずがなかった。あのままではゴーレムの格好的になる。

そんな春奈の心配は杞憂に終わった。ルイズが降りてきたのを見た才人がすぐさまルイズを守るように動いている。

そして、ルイズが持っている『破壊の杖』を才人が持つと、才人はなめらかな動作で『破壊の杖』を扱い、ゴーレムに向けて放つて

みせた。

名前の通り『破壊の杖』の威力は絶大だった。先ほどまで才人が苦戦したゴーレムを一撃で吹き飛ばし、あっという間にただの土くれにしてしまう。

ゴーレムが完全に動かなくなったことを確認すると、シルフィードに乗った三人も降りてくる。

「さすがね、ダーリン」

「うわっ」

「ちょっと、何やっているのよ」

才人に飛びついたキュルケを離そうとルイズが引つ張っているのを見ながら、ようやく春奈は安心していた。

「平賀くんが無事で良かった」

「皆さん、無事でしたか。ゴーレムの姿が見えたので、急いで来たのですが。あ、これが『破壊の杖』ですね」

ロングビルは地面に転がっていた『破壊の杖』を拾い上げる。

「すみません。無断で使ってしまった」

ルイズが謝ると、ロングビルから柔和な笑みが消える。

「心配いりませんよ。あんたたちはここで死ぬんだからな」

「なっ、あなたがフーケだったの」

「そうだよ。四人は杖を捨てな。あんたは剣だよ」

ロングビル、フーケから『破壊の杖』を向けられて四人は杖を地面に置くが、才人だけは剣を地面に置かなかった。

「早く捨てな。あんたのご主人様が私のゴーレムみたいに吹き飛ばすよ」

「平賀くん」

「大丈夫だ」

才人が思いつきりフーケに向かって突撃する。

「死にな」

フーケが引き金を引くが、『破壊の杖』は反応しない。

「ちっ、こんな時に故障かい」

『破壊の杖』を投げ捨てて懐から杖を取り出そうとするが、それは接近戦では致命的な遅れだ。

フーケは才人の突進に吹き飛ばされ、木にぶつかると気絶してしまった。

「残念だけど、それは単発式の武器なんだよ。だから、もう弾切れなんだ。って、もう聞こえてないよな」

その後、フーケは王宮の騎士たちに引き渡された。

そして、オスマンから舞踏会のことを教えられ、キュルケたちは退室したが、才人と春奈だけはどうしてもオスマンに聞きたいことがあったので二人だけ残っていた。

「聞きたいことは何かね」

「『破壊の杖』のことです。あれは元々、私たちの世界のもの。どうして学院にあるんですか」

「ほう、君たちは彼と同じ世界の人間なのか」

オスマンは30年ほど前に自分がワイバーンから救われたことを話し、結局そのまま恩人が死んだことを伝えると、才人は思いつきり拳を叩きつける。

「畜生、せつかく手がかりを見つけたと思ったのに」

「それと、私たちのルーンなんですけど。これはガンダールヴって読むんですよね。どういう意味ですか」

「それは始祖ブリミルが従えたと言われる伝説の使い魔じゃよ。ガンダールヴは主人を守るためにありとあらゆる武器を使いこなしたそうじゃ」

「それでは魔法を使う私は？」

「分からん。伝説のせいかな文献もほとんど残っておらんのだ。もし、分かったことがあれば、すぐに知らせよう」

「ありがとうございます」

「ほれ、お主らも舞踏会を楽しんでくると良いじゃろう」

「はい」

二人が退室した後、オスマンは誰かに聞かせることもなく、咳いた。

「伝説、か。何かの前触れじゃないと良いのじゃが」

才人は一人で舞踏会の会場にいた。会場に向かう途中で、春奈はキュルケに連れていかれた。

「かなり浮かない顔をしているね、相棒」

「うるせえ、せっかく帰る手がかり見つけたと思ったら何もわからなかったんだ。落ち込まない方が無理だろう」

「別の世界ね。俺には全く想像できないよ」

「剣なんかには想像できるかよ」

「言ってくれるね、相棒」

「うるせえよ」

「帰る方法がわからなくてショックだったのは分かるけど、あんまり飲みすぎない方がいいよ。それに、ずっと剣に話しかけている姿も不気味だよ」

「ああ、悪い。えっ」

「似合わないかな。一応キュルケから借りただけど、やっぱりキュルケみたいにスタイルが良くないからね。こういう格好って初めて着ただけど」

「いや、十分似合っている」

「そう?」

「ああ」

「平賀くんもタキシードでも借りれば良かったのに」

「俺は良いよ」

沈黙が二人の間を支配する。さすがのデルフリンガーも空気を読んで黙ったままだ。

「私たちって、ずっとこのままなのかな」

思わず春奈の方から隠していた本音が漏れる。この世界に来た時からずっと抱えている不安、実際に帰れなかった人間の話を聞いてしまうと、その気持ちは膨らむ一方だった。

「何とかなる。いや、何とかしてみせるさ」

「平賀くん」

「従兄の唯人兄さんの受け売りなんだけど、どんなファンタジーみたいな奇跡も結局は原因がある。ルイズが俺たちを呼んだのなら帰る方法もルイズと一緒にいたら見つかるんじゃないか」

「強いね、平賀くんは」

「強がっているだけだつて。高風がいてくれなかったら俺はきつと伝説の力で調子に乗っていただろうしな」

「そっか。これからは私も才人って呼んでいいかな。いつまでも名前で呼ぶのも変だし、私のことも春奈って呼んで」

「分かった、春奈」

「うん。よろしく、才人くん」

「ヴァリエール公爵令嬢のおなーリー」

ルイズの入場を告げる声が聞こえると春奈は才人から離れた。

「私はタバサと一緒にご飯食べるって約束していたんだ。才人くん、飲みすぎないようにね」

春奈がタバサのところに行くと、タバサはダンスには目もくれず、ただ食べているだけだった。何も言わずに隣に並んで食べていると、そこにダンスを終えたキュルケもやってくる。

「あら、二人とも踊らないの」

「興味ない」

「あ、私は踊れないし。キュルケはどうしたの？」

「別に」

そういう割にどこか機嫌が悪そうに見える。

「主役を取られた」

「えっ」

タバサが指差した方を見ると、そこではルイズと才人が踊っていた。

周りの視線も今は二人に集まっている。ルイズは周りの視線に気づいておらず、才人の方も初めてのダンスに余裕がないため、気づいていない。

内心ではライバルだと思っている相手が自分よりも注目を集めている光景はキュルケにとってあまり面白いものではない。そのため、さっさとダンスを切り上げてタバサたちのところまで来たのだ。

「あれ、タバサ。どうしたの」

「帰る」

そう言うとタバサは会場から出ていった。タバサがいなくなった以上、春奈もこれ以上ここにいる理由もない。下手にダンスを断つて男子のプライドを傷つけければ、面倒が起ることは予想できる。

「それじゃあ、私も帰るね」

「放っておいていいの」

「あの二人なら大丈夫だと思う。それに、いざって時はキュルケに任せる」

「そんな面倒、冗談じゃないわよ」

春奈たちが退場したことも知らずに、才人とルイズはまだ踊っている。

「あんたが違う世界から来たってこと信じてあげてもいいわ」

「ルイズ、ありがとう」

「ふん。あんたみたいなのでも私の使い魔なんだからね。信じてあげるわよ。その代り、ちゃんと私のことを守りなさい」

「わかった。おっと」

そう返事するが、慣れないダンスのため、思わずルイズの足を踏みそうになる。

「ああ、もう。私がリードするわよ」

「悪い」

「何よ、意外と仲良くやっているじゃない」

春奈たちが帰って一人になったキュルケはつまらなさそうに言う
しかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4503n/>

ゼロの使い魔～魔法使いの従兄弟～

2011年10月26日13時00分発行